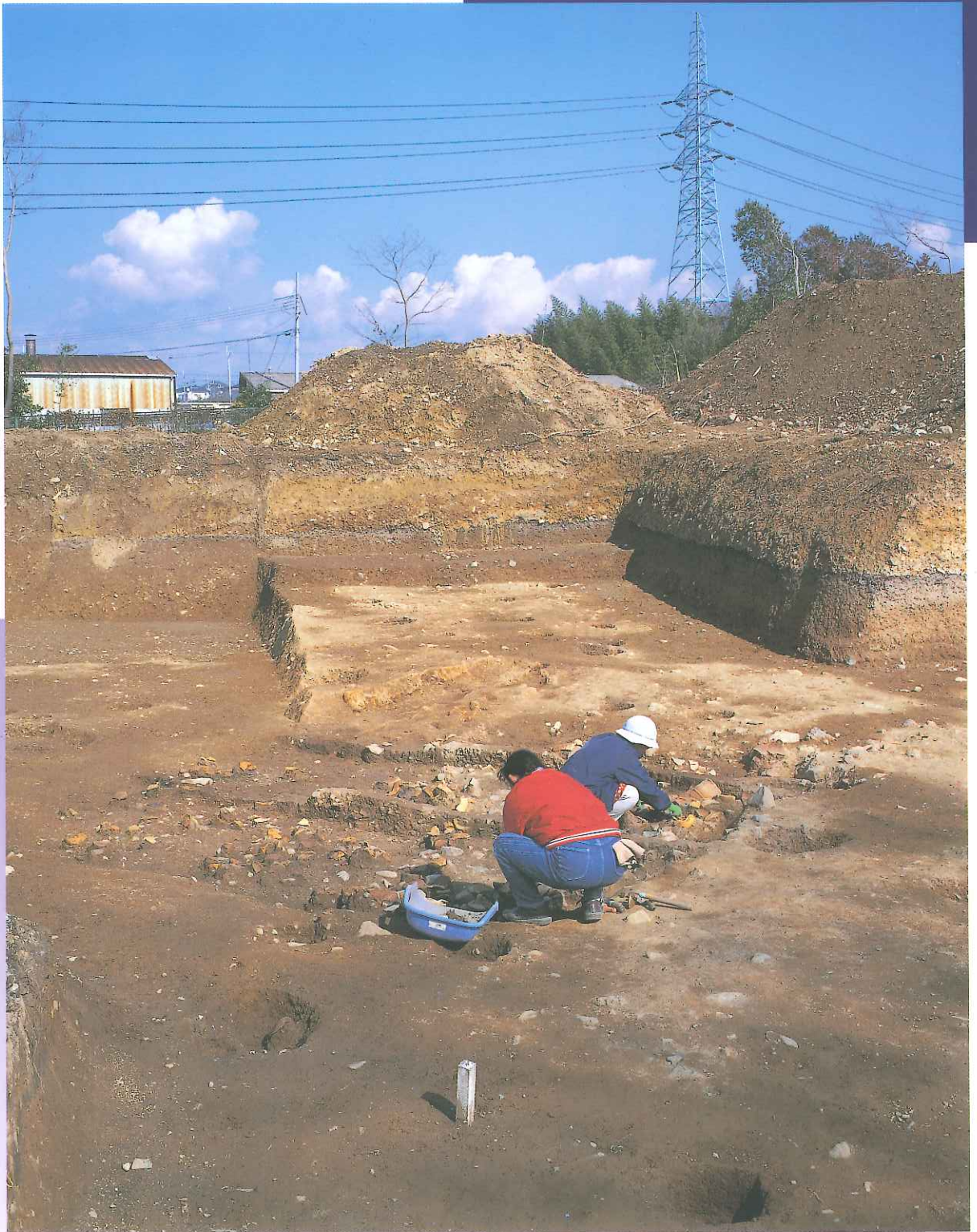


西隼上り遺跡発掘調査概報





埴輪窯S X08・作業場S X09全景（南から）



作業場S X09内における埴輪・土器の遺棄状況（南から）

序

宇治市では、民間のマンション建設や宅地開発が急増しており、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が近年にたく増加しています。

発掘調査成果の具体的内容は後述するとおりですが、西隼上り遺跡の所在する「菟道」は古代には「うじ」と表記される古代の宇治の中心地と考えられているところです。今回の発掘調査では、埴輪窯1基、竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟等が主に検出されました。特に埴輪窯は、発掘調査では府内で2例目となる稀少な遺構です。また、埴輪窯は1基しか発見されなかったことから、近年発見されている大規模な埴輪生産とは異なった小規模な生産を行っていたことが想定され、古墳時代の埴輪生産の在り方を解明していく上で重要な発見であったと思われます。

本書は、この発掘調査成果を概報としてまとめたものです。本書が多くの方々目にふれ、広く宇治の歴史解明や文化財保護の高揚に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた事業者である宮林荘司氏をはじめ、発掘調査の実施についてご理解いただいた地元町内会、また調査に関してご指導・ご助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成7年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が平成6年度に開発事業に伴って発掘調査した西岸上り遺跡の成果概要である。
2. 調査地の地番は、京都府宇治市菟道藪里28番地の1及び27番地である。
3. 本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第33集に当たる。
4. 本書で使用する方位はすべて磁北である。
5. 本書が収録する発掘調査関係資料は宇治市教育委員会が管理・保管している。
6. 本書の編集は社会教育課が行い、編集実務及び執筆を浜中邦弘が行った。
7. 埴輪窯の科学的分析結果（付載）については前中一晃氏（花園大学）から報告をいただいた。

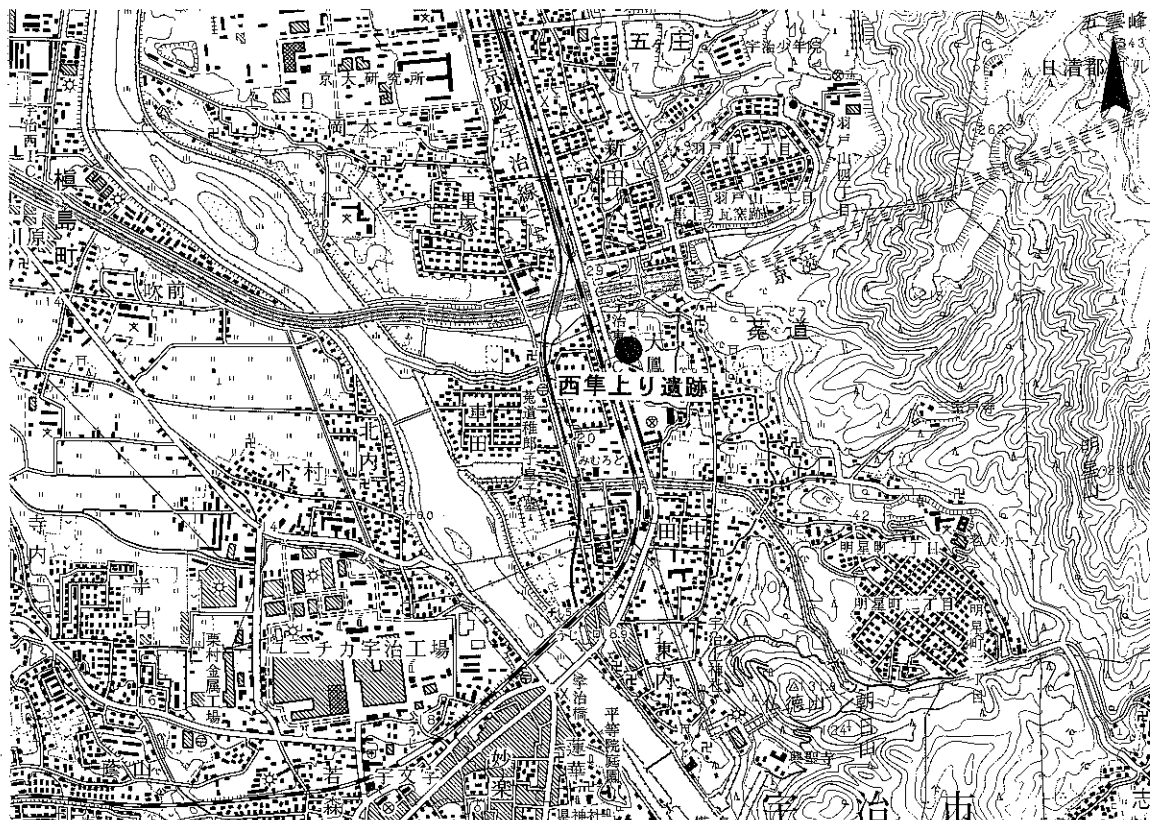
本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
	A. 地理的環境	2
	B. 歴史的環境	3
III	調査の経過	4
	A. 発掘調査の経過	4
	B. 発掘調査の体制	6
IV	検出遺構	7
	A. 1トレンチ	7
	B. 2トレンチ	23
	C. 3トレンチ	23
V	出土遺物	24
	A. 1トレンチ出土遺物	24
	B. 2トレンチ出土遺物	40
VI	まとめ	41
	註)	43
	付載 西隼上り遺跡埴輪窯焼土試料の考古地磁気測定	44

I はじめに

ここに報告をするのは、宇治市菟道藪里28-1, 27において実施した西隼上り遺跡発掘調査の成果概要である。

西隼上り遺跡の位置する菟道（古代表記名ウヅ）は、旧山城国宇治郡宇治郷にあたる。宇治郡は、現在の京都市の山科盆地から宇治市の宇治川東岸部を範囲とし、宇治郷はその最南端部に位置する。その名が示すようにこの地域が宇治郡名称発祥の地であり、それは同時に古代宇治郡の中心的な位置を当地が占めていたとも理解される。それを傍証するように、菟道には遺跡が密に分布し、時代的には古く縄文時代まで溯る。尖頭器や押型文土器等が西隼上り遺跡で発見されている。この他に多彩な副葬品をもつ二子山古墳や瓦塚古墳を始めとして、川原寺式軒瓦を創建期とする大鳳寺跡等があり、特筆される遺跡が多数存在する。また今年度夏の菟道遺跡の発掘調査では、削平された前方後円墳（古墳後期）が発見され、菟道地域の重要性を再認識させるものとなった。今回の発掘調査は、学生寮建設に伴う緊急発掘調査であり、開発事業者からの委託をうけ本市教育委員会が実施した。調査期間は平成6年12月20日から平成7年3月5日までで、調査面積は約1250㎡である。



第1図 西隼上り遺跡の位置 (1:25,000)

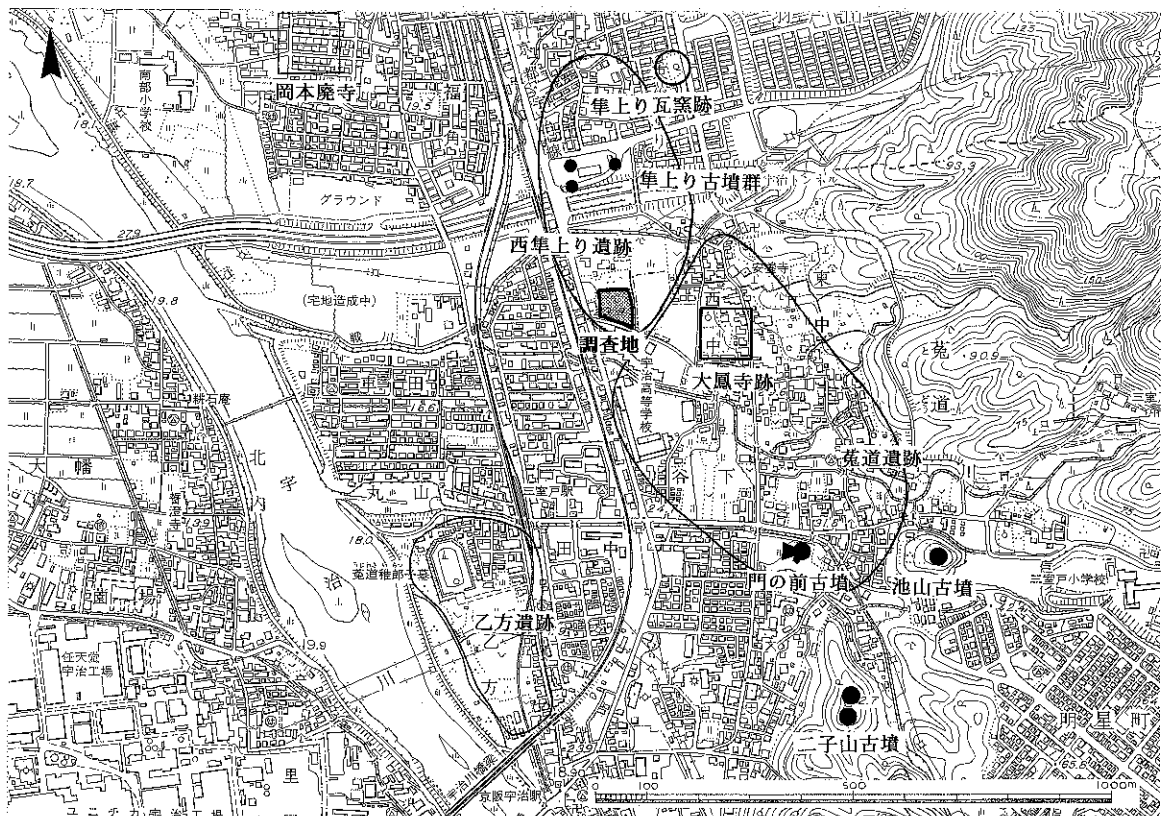
II 位置と環境

A. 地理的環境

琵琶湖から唯一流れ出す瀬田川は、山間を縫うようにして流れ、京都府との境で名を宇治川と改め平野部へと流れ出す。平野部に出た宇治川は北に流れをとり、市域を南北に貫流する。この宇治川を境にして西岸を宇治市西部、東岸を宇治市東部とに一般的に呼称されている。西隼上り遺跡は、この宇治市東部の南端部に位置する。現在の宇治川の流路は、豊臣秀吉の伏見城築城時の太閤堤によって決定されたもので、それ以前は、山間部より流れ出ると直接巨椋池に注ぎ込んでいた。巨椋池は、昭和16年まで存続した巨大淡水湖である。

西隼上り遺跡が所在する菟道は、旧国郡制では宇治郡宇治郷にあたり、前述の巨椋池の東岸部南端部に位置する。東側には、標高300m程の山々が連なり、菟道はそこから派生した丘陵の先端付近に展開する。そして戦川・大谷川・大鳳寺川によって形成された扇状地が菟道地域の主要な地形となっている。

調査地は北東から南西に向かった緩やかな傾斜面で、標高は調査地北東端の高所で26.5m、南西端の低所で24mを測る。



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

B. 歴史的環境

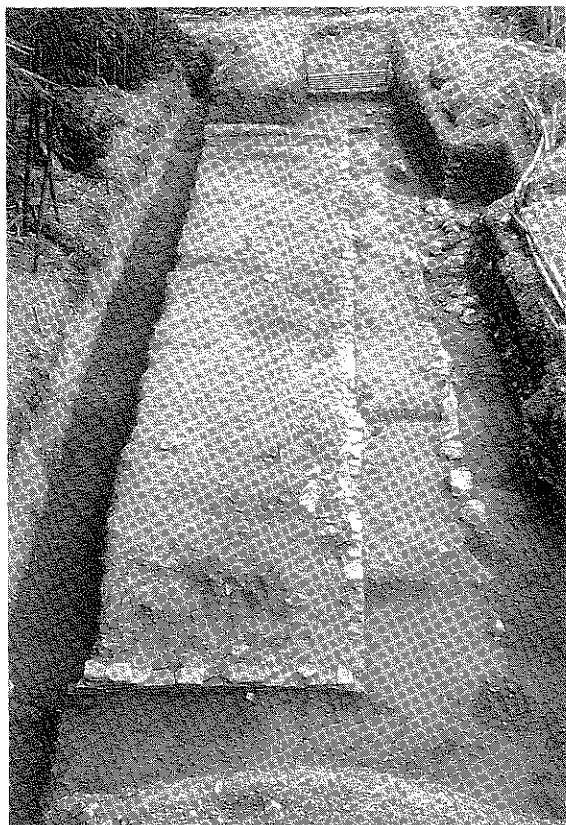
ここでは、西牟上り遺跡が所在する菟道地域の歴史を概観する。

旧石器時代についてはまだ資料は得られていない。宇治市では、木幡の二子塚古墳盛土内より黒曜石製のナイフ形石器が発見されているのが唯一の例である。縄文時代では、西牟上り遺跡の調査で尖爾器や押型文土器片、深鉢型土器片が出土している。弥生時代では乙方遺跡がある。乙方遺跡では弥生時代の竪穴住居跡2棟、壺棺3基、方形周溝墓1基等が見つかっている。弥生中期の集落は宇治川東部では初めての確認である。

古墳時代では、古墳の実態は比較的判明しているものの、集落については実証するための資料が乏しい。前期古墳はまだ確認されていない。中期では主な古墳に丘陵上の二子山古墳、平地部の瓦塚古墳がある。二子山古墳は2基の古墳からなり、円墳である北墳が5世紀前半、方墳である南墳が5世紀後半である。瓦塚古墳は5世紀後半に築造された直径30m程の円墳である。中心主体部の礫塚からは、金・銀の頭金具をもつ玉杖形金銅製品を始めとして多量の玉類や馬具等が出土している。後期古墳では、菟道遺跡の発掘調査で、削平前方後円墳(門の前古墳)が見つかった。全長約34mの一重の濠をもち、多岐にわたる形象埴輪と円筒埴輪を有する菟道地域最後の首長墳と思われる。

日本初の本格的寺院飛鳥寺が造営されてからまもなく豊浦寺が蘇我氏主導により造営された。この豊浦寺に瓦を供給したのが牟上り瓦窯跡である。その約半世紀後、宇治にも寺院の造営が開始される。大鳳寺跡、岡本廃寺である。大鳳寺跡は川原寺式軒瓦を創建瓦とする寺院で、瓦積基壇の金堂跡が見つかる。その他の堂塔は不明である。寺跡の約600m南の丘陵斜面地に創建瓦窯(山本瓦窯跡)が存在する。岡本廃寺は、旧巨椋池のほとりに造営された寺院で、金堂跡、塔跡、講堂跡、回廊跡等が検出されている。法起寺式伽藍配置をとり、法隆寺式軒瓦を創建瓦とする。講堂は掘立柱建物であり、特に二重板塀の回廊状遺構は特異なものといえる。

その後、三室戸寺が創建される。平安後期以降、西国三十三カ所観音巡礼の一つとして多くの巡礼者を迎え栄えた。



第3図 大鳳寺跡金堂基壇(西から)

Ⅲ 調査の経過

A. 発掘調査の経過

調査地（菟道藪里28-1、27）は、北東から南西に向かった緩やかに傾斜しており、標高は北東で26.5m、南西で24mを測る。周辺の地形状況から判断すれば当該地は比較的旧地形がそのまま残っているものと考えられた。調査地の東約130mには白鳳寺院大鳳寺跡が存在する。調査前の現状は竹藪であった。

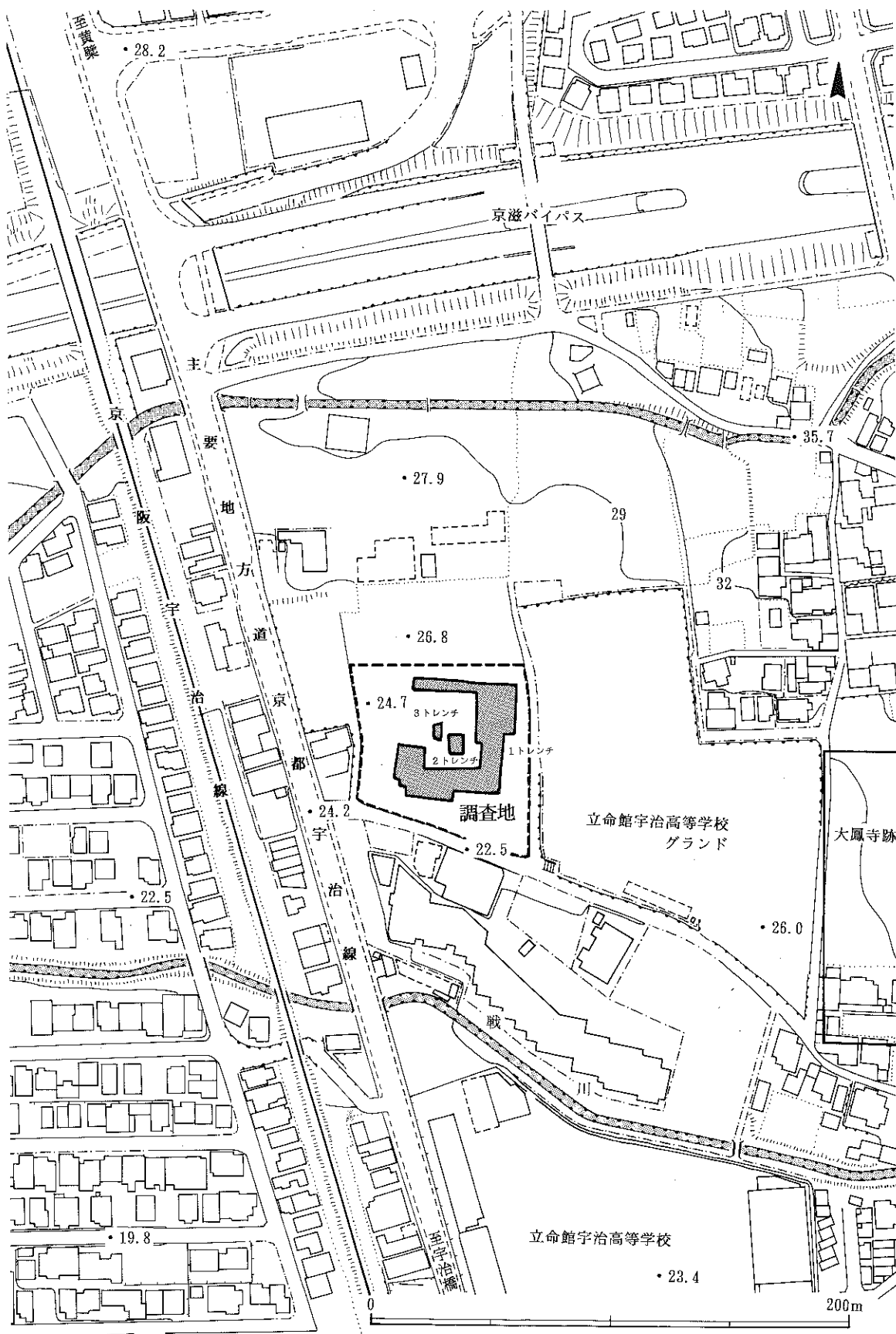
作業開始日は平成6年12月20日である。調査はまず遺構層位の確認のために試掘トレンチを設定し、重機によって掘削を開始した。トレンチは、東方に大鳳寺跡が存在することをふまえ、調査地内の東側に南北に細長いトレンチを設定した。表土除去後、茶褐色土層が表れ、その時点では明確な遺構は明確にできなかったが、ほぼ完形で杯身2点と平瓶2点が集中して出土する遺構状のものがあつた。この層をとりあえず遺構面と判断した。調査が年末であったため、年末・年始にかけての長期休暇に入ることから、この段階で一旦調査を中止し、年始から本格的に調査を開始することとした。遺物の出土状況は簡単な記録作成に止め、すぐに遺物を取りあげた。年が改まった1月のすぐに調査を再開した。調査地中央部は大きく陥没しており、すでに削平を受けているものと判断して、調査はその周辺を、遺構の有無を確認しながら、遺構が検出された地点を重点的に拡張して調査することとした。トレンチの平面形は「コ」字形に結果的になった。そして調査地の南西で埴輪窯が見つかり、調査の主力は埴輪窯とその周辺になった。

トレンチ（1トレンチ）は、「コ」字状の変則的な形状になってしまったので、遺物・遺構の整理時における煩雑さを避けるため、地区割を設定することとした。概ね4ブロックに



第4図 現場作業の1コマ

分け、Ⅰ～Ⅳ区とした。また埴輪窯及びそれに付随する作業場と想定される方形の竪穴状遺構全体に2m方眼の地区割りを設定し、遺物の出土状況の図面作成を行ったり、その状況写真を撮影する等の記録作成そして、遺物の取り上げを行った。遺構が完掘段階に入ってから、全体の記録作成を行っていった。発



第5図 調査地周辺の地形図

掘調査終盤の2月15日に報道への発表を行った。その後埴輪窯の操業時期を考えていく一つの方向性として花園大学の前中一晃先生に依頼して3月1日に考古地磁気測定を行ってもらい、考古学以外のアプローチでの調査を実施した。3月1日から埴輪窯以外の箇所から重機による埋め戻しを行った。埋め戻しと併行しながら、廃土置き場として利用した調査地中央部分、すなわちコ字トレンチが囲む地点（削平想定地点）で、念のために遺構の有無確認のグリッド掘り調査を行った。グリッドを2カ所設定し、東側のグリッド（後の2トレンチ）で土壙状の遺構が検出された。その埋土中にトレンチで検出した埴輪窯と同一手法の埴輪片と須恵器の甕片が出土した。ただちに遺構の掘削と遺物の取り上げを行い、記録を作成して埋め戻しを行った。埋め戻しは翌日完了、発掘調査の全日程を終了した。

B. 発掘調査の体制

今回の発掘調査に関係する機関・体制は下記のとおりである。

発掘主体者	宇治市教育委員会	
発掘責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
発掘担当者	社会教育課 文化財保護係	浜中邦弘
発掘事務局	宇治市教育委員会 参事	池田正彦
	同 社会教育課長	堀井健一
	同 社会教育課 文化財保護係長	吉水利明
	同 社会教育課 主任	加藤きみ江
調査参加者	時実奈歩、久保千恵子、山下由香、宮崎一弥、檜岡和歌子	

発掘調査の実施に伴う諸種の作業委託については、下記に発注した。

土砂除去	株式会社 発掘建設リンク
空中写真撮影	日開調査設計コンサルタント

発掘調査への御協力

本発掘調査の実施期間中に専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただいた。記して謝意を表したい。順不同・敬称略

久保哲正・森下衛（京都府教育委員会）、伊達宗泰（花園大学）、辰己和弘（同志社大学）、上原真人（奈良国立文化財研究所）、高橋美久二・平良泰久・辻本和美・石井清司（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、山田邦和（京都文化博物館）、鐘方正樹・中島和彦（奈良市教育委員会）、辻川哲朗（加茂町教育委員会）、小泉裕司（城陽市教育委員会）、鷹野一太郎（田辺町教育委員会）、中島皆夫（財団法人長岡京市埋蔵文化財センター）、真鍋成史（財団法人交野市文化財事業団）、穂積裕昌（三重県埋蔵文化財研究センター）、古閑正浩（大山崎町教育委員会）、西村匡広（花園大学学生）、井上智代、南山城考古学学習会。

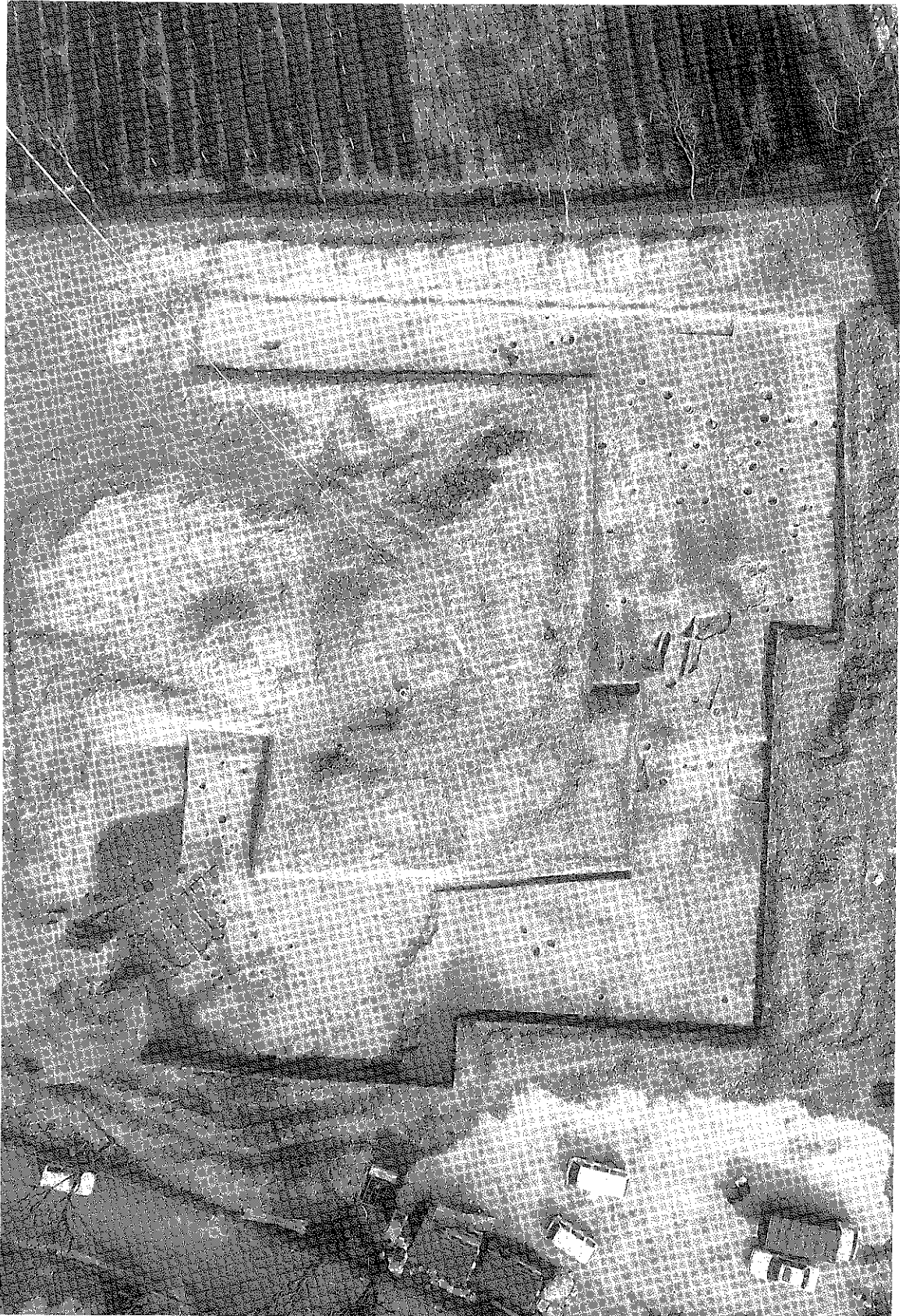
IV 検出遺構

今回の発掘調査で検出した主な遺構は、埴輪窯1基、作業場1棟、竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟、土壇、柱穴等である。時代的には遺物から判断すると埴輪窯が操業された古墳時代中期（5世紀）から平安時代後期（12世紀）までの長期にわたって認められる。設定したトレンチは計3トレンチである。2・3トレンチは、1トレンチを埋め戻した後にその廃土置場となっていた地点をグリッド掘りで調査したその結果、遺構が確認されたことから、トレンチとして設定（東側を2トレンチ、西側を3トレンチ）し調査したものである。この章では主に1トレンチで検出された遺構の概要を中心に記述していくこととする。

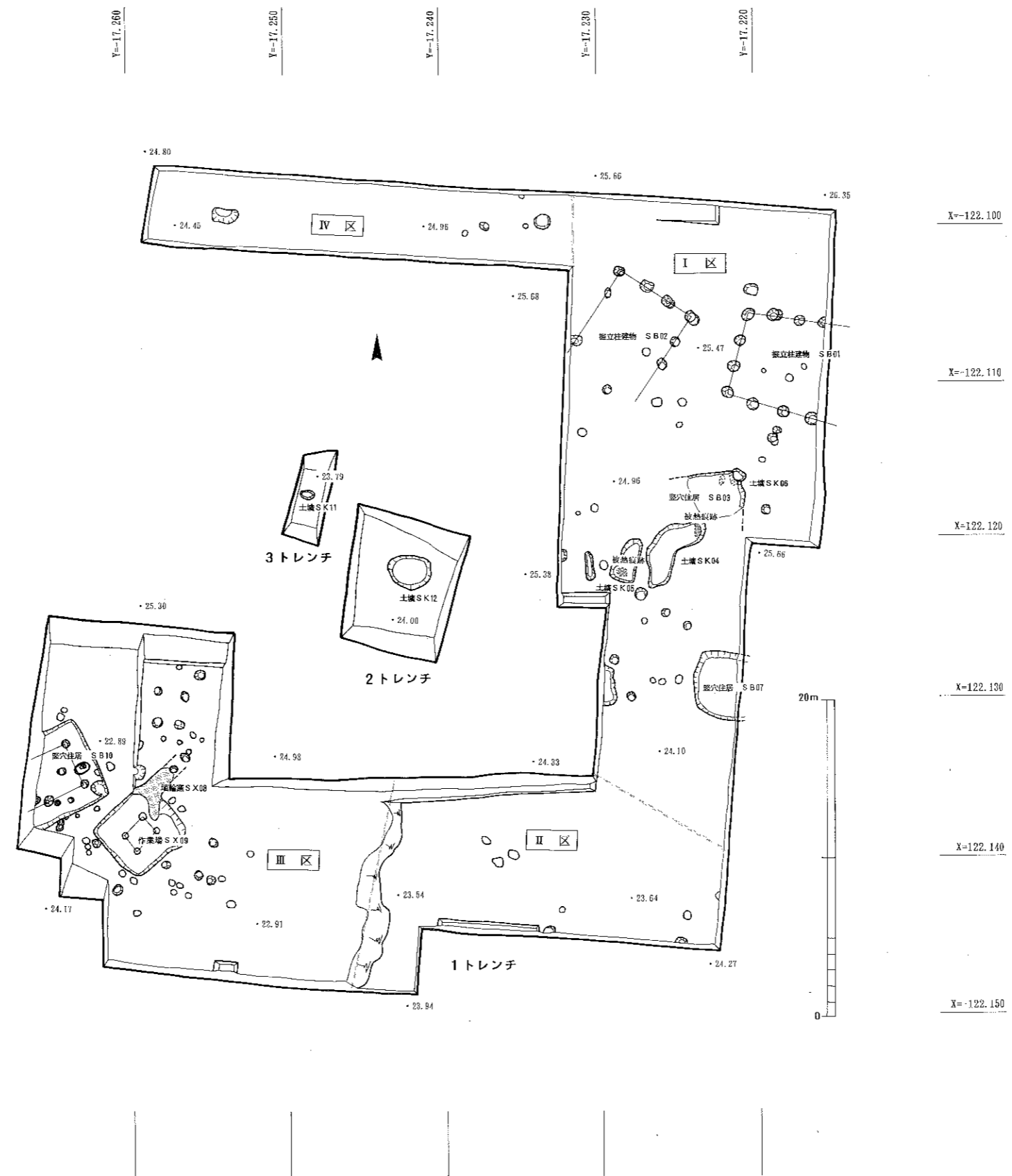
A. 1トレンチ（第6～28図）

土層の状況 Ⅲ区では厚さ1mにもなる淡黄色土層が堆積し、その土層中には、近世遺物とともに縄叩きや格子叩きのある丸・平瓦等、大鳳寺跡関連のものと思われる遺物が混在してみられた。地元の方の話によれば、当地に東接する宇治高等学校（現立命館宇治高等学校）の第2グラウンドを造成した際にでた残土を当地に移動したということである。また、この造成に伴って実施した発掘調査では瓦が多量に出土している。¹⁾ 以上のことからこの淡黄色土層は、この造成時の際の残土であり、包含されていた遺物は、グラウンド内に埋蔵されていたものと理解した。遺物及び位置関係等から大鳳寺跡に関連した諸施設がグラウンド内にも展開していたと判断した。この堆積層がみられるのはⅢ区周辺だけである。この堆積層を除去すると、トレンチ全体を覆い尽くす厚さ30cm程の若干の礫を含んだ茶褐色土層があらわれた。Ⅲ区以外の地域では、この堆積層を除去すると褐色土の遺構基壇面が検出されたが、Ⅲ区ではさらに厚さ60cm程の礫を少量含む淡茶褐色土層があり、それを除去すると埴輪窯等の遺構が検出される基壇面があらわれた。Ⅲ区に限っては厚さ2m余りにも及ぶ堆積層が形成されていた。本来の地形は、北東から南西に向かって緩やかな傾斜面であったと理解された。そして埴輪窯はその傾斜面を利用して構築された。

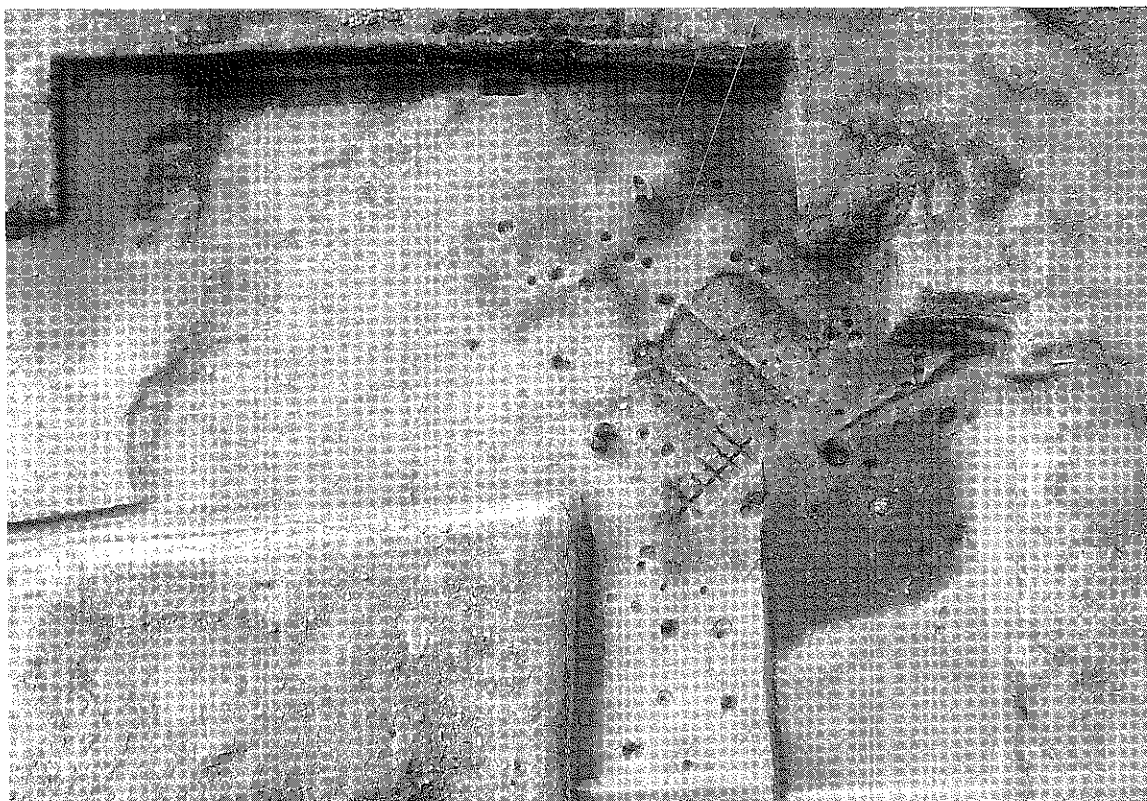
埴輪窯SX08（第10～14図） 南緩斜面に構築された埴輪窯である。確認されたのはこの一基だけである。煙出し部と焼成室の大半はすでに消失しており、燃焼室とわずかに焼成室が残っているという残存状態であった。このため窯の中心部ともいえる焼成室の詳細な状況は全く分からなかった。現状での焼成室の残存長は1m程である。床面は一面しかなく、後述する作業場SX09から出土した埴輪が少ないこと等から短期間操業であったものと考えられる。燃焼室から焼成室にかけての床面は比較的緩やかに立上がり、その高低差は10cm程である。窯の構築基盤層は、地山層の明褐色土層で、拳大くらいの礫を多く含む。埴輪窯の周



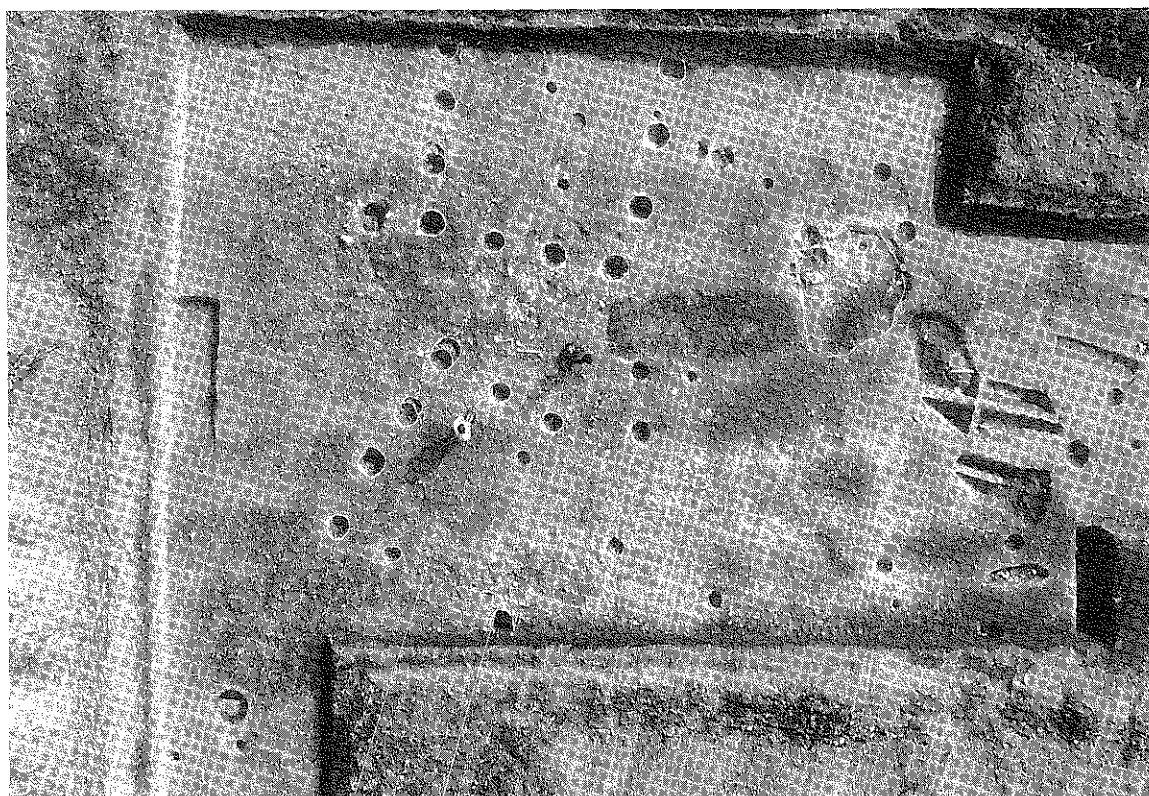
第6図 調査地上空写真…上が北



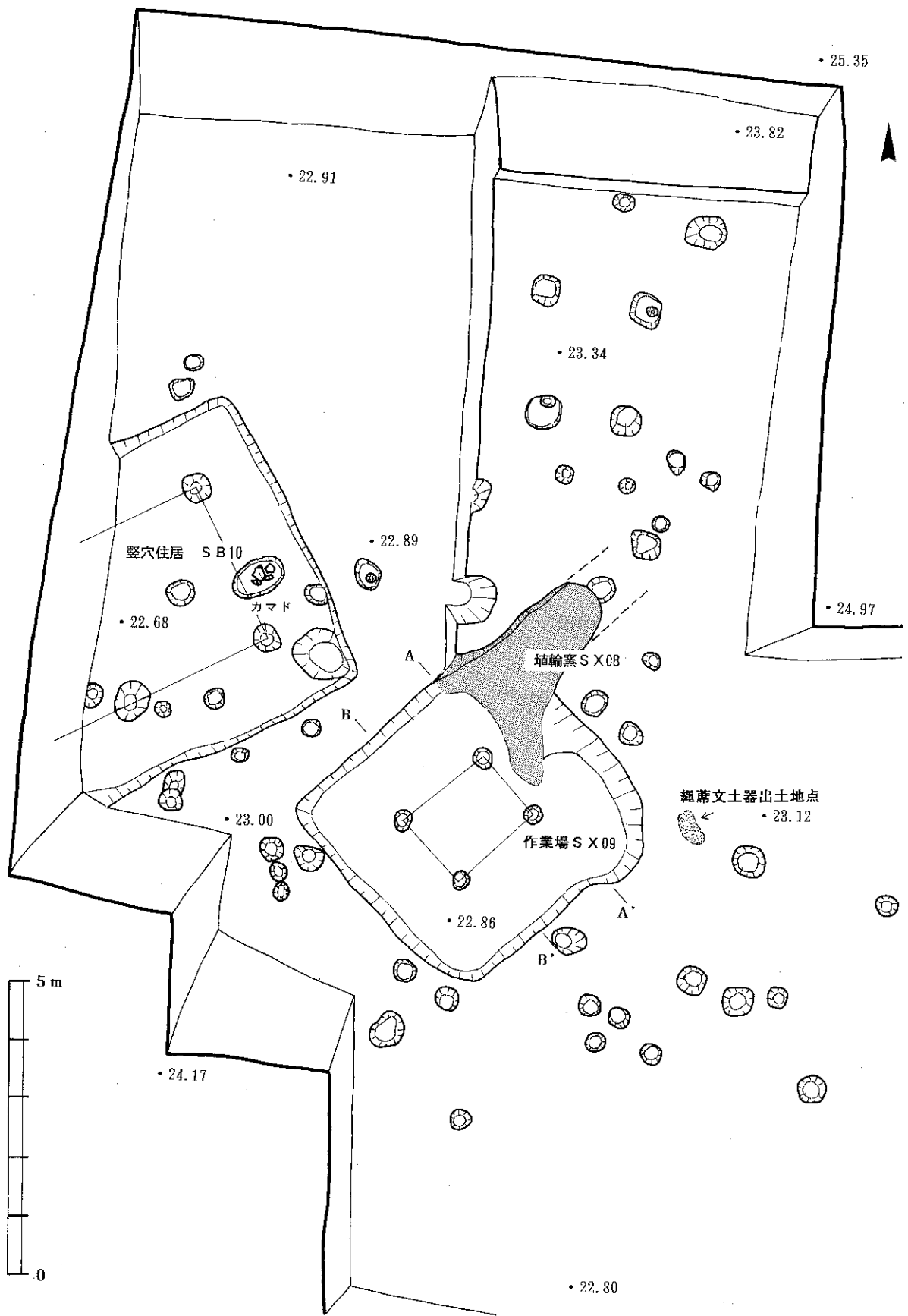
第7図 検出遺構平面実測図



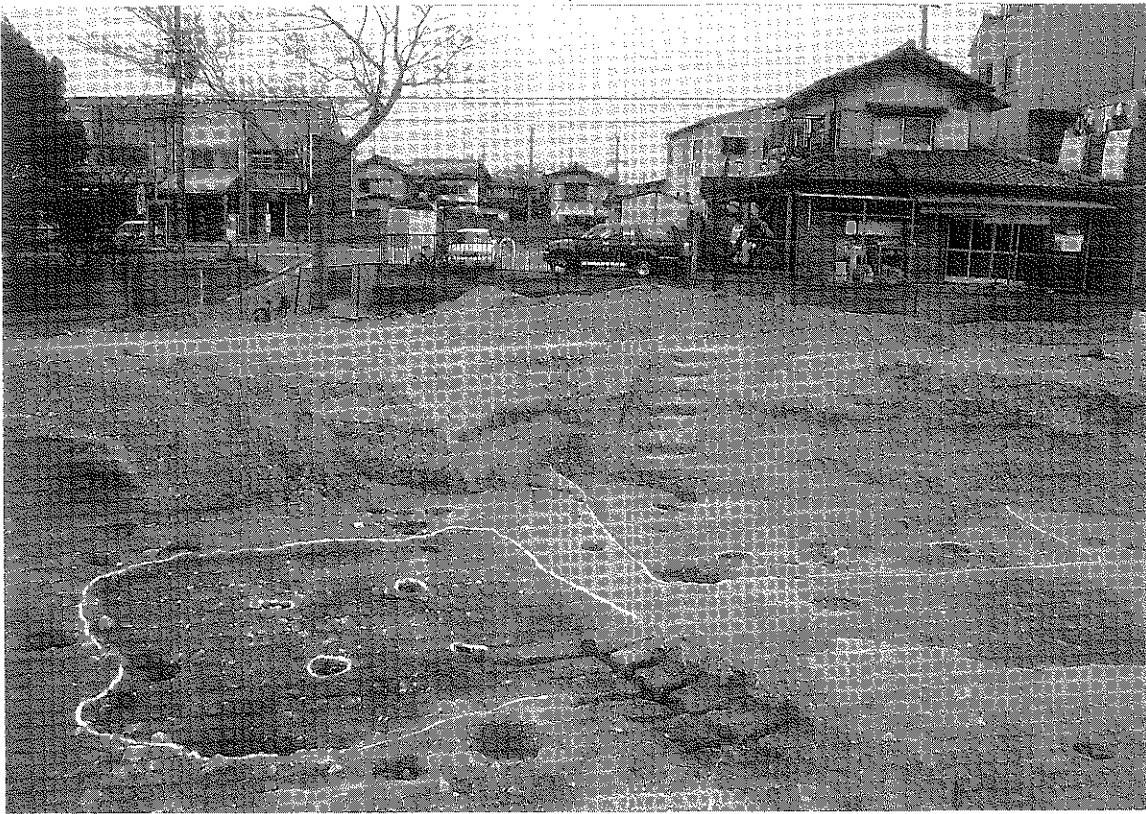
第8図 Ⅲ区（埴輪窯S X08付近）上空写真…上が南



第9図 Ⅰ区（掘立柱建物S B01・02付近）上空写真…上が東



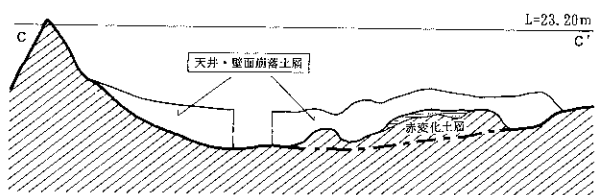
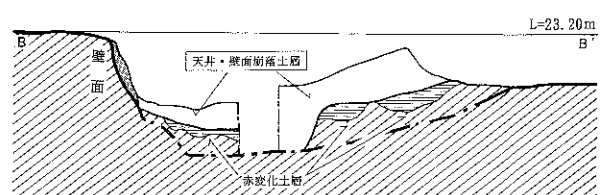
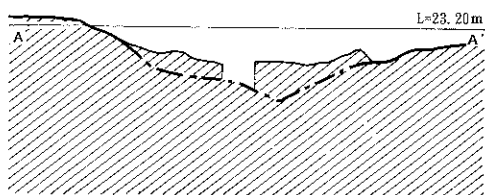
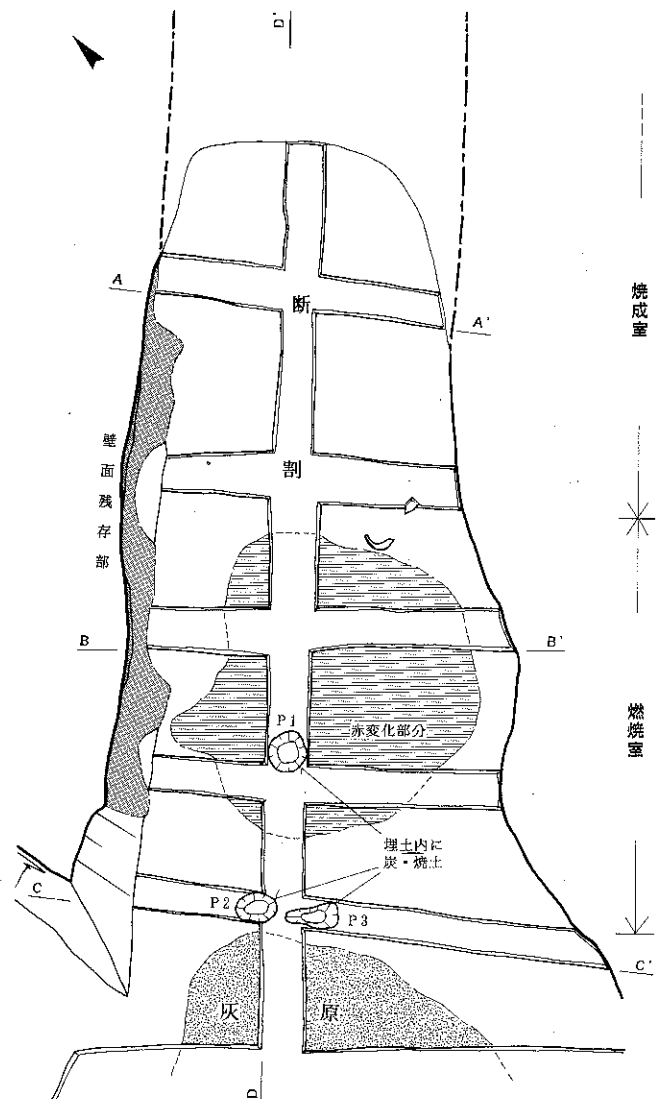
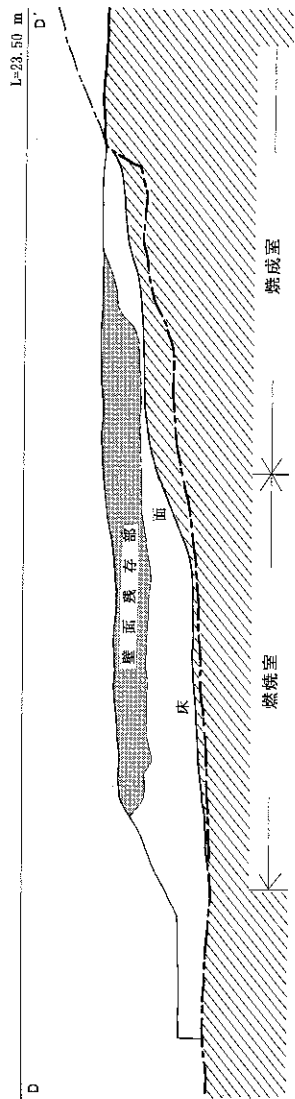
第10図 III区検出遺構平面図



第11図 埴輪窯 S X 08・作業場 S X 09・竪穴住居 S B 10（北東から）

囲は比較的礫は少なく、掘形の存在を考えてみたものの、明らかにはできなかった。埴輪窯 S X 08に付設する作業場 S X 09から遺棄された土器や埴輪等とともに、スサが入り混じった団子状の焼土塊が十数点程確認された。窯が構築された頃の地形は、北東から南西方向に向かって緩やかにさがる斜面地が想定され、埴輪窯 S X 08はこの緩やかな斜面地を若干掘り窪め、壁面・天井部を粘土で構築し造られた（いわゆる半地下式の窯）と考えられる。出土した焼土塊は、この壁面・天井部に貼り付けられたスサ入り粘土と思われる。燃焼部には0.8～1 mの円形状に広がって床面が赤変化していた。窯の開口部が想定される地点で、窯の主軸に直交して並んで2つ、燃焼部に1つの計3つの小ピットが確認された。直径15～20 cm程と小さく、埋土には炭・焼土が含まれるも土器・埴輪は認められなかった。性格は判然としないが、半地下式の窯であることから窯構築時における窯の基礎骨組みの木材の据え付け痕ではないかとも考えられる。灰原は南北に設定したアゼの埴輪窯に近い A-A' 間で2層確認できたが、どちらも通常の灰原とは異なり極めて少量である。最初の灰原（第15図掲載土層の番号6）については無遺物であり、半地下式構造等から考えて、窯構築に際しての空焚きによってでた炭・灰の可能性を指摘しておきたい。

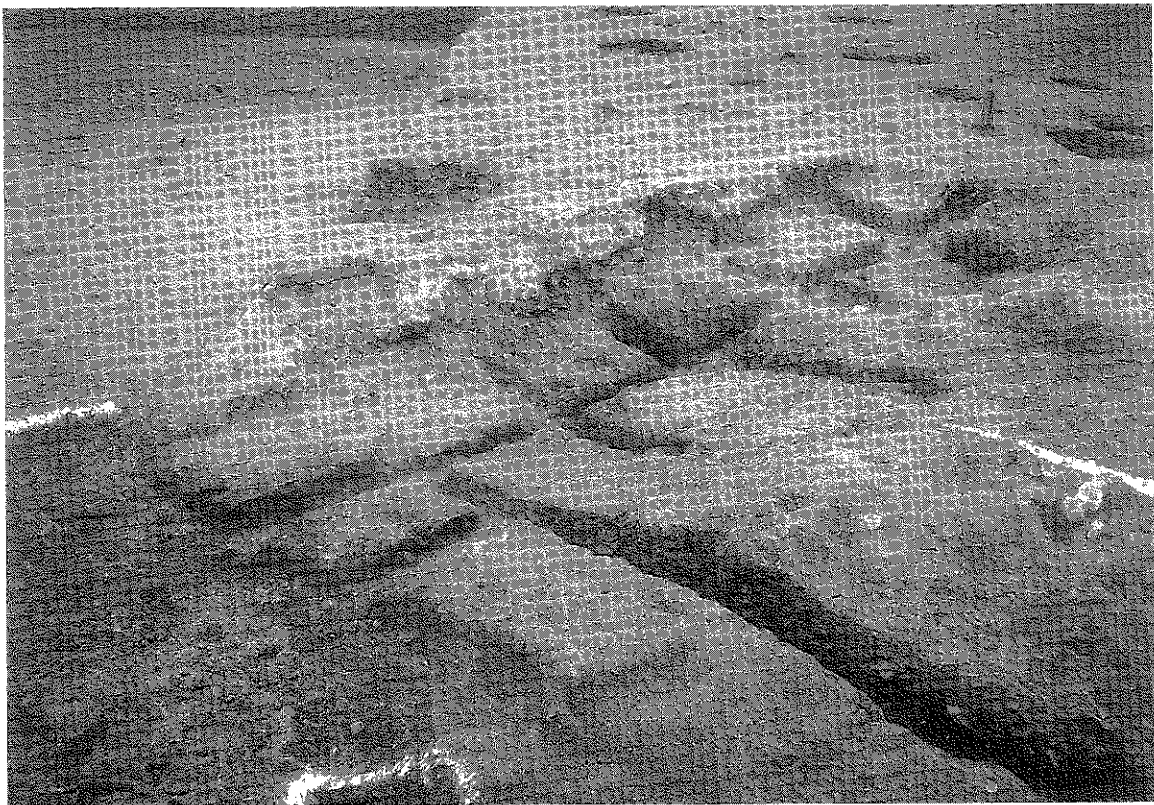
作業場 S X 09（第15～18図） 埴輪窯 S X 08に付随して取り付く方形（一辺約4.5～4.8 m）の竪穴状遺構で、埴輪窯 S X 08はこの遺構の北側隅からのびて北東方向に向かって構築され



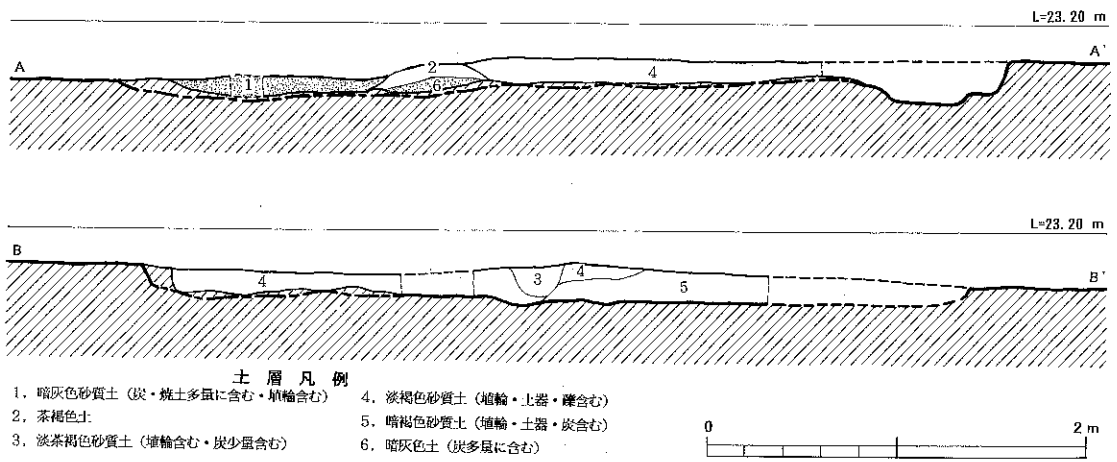
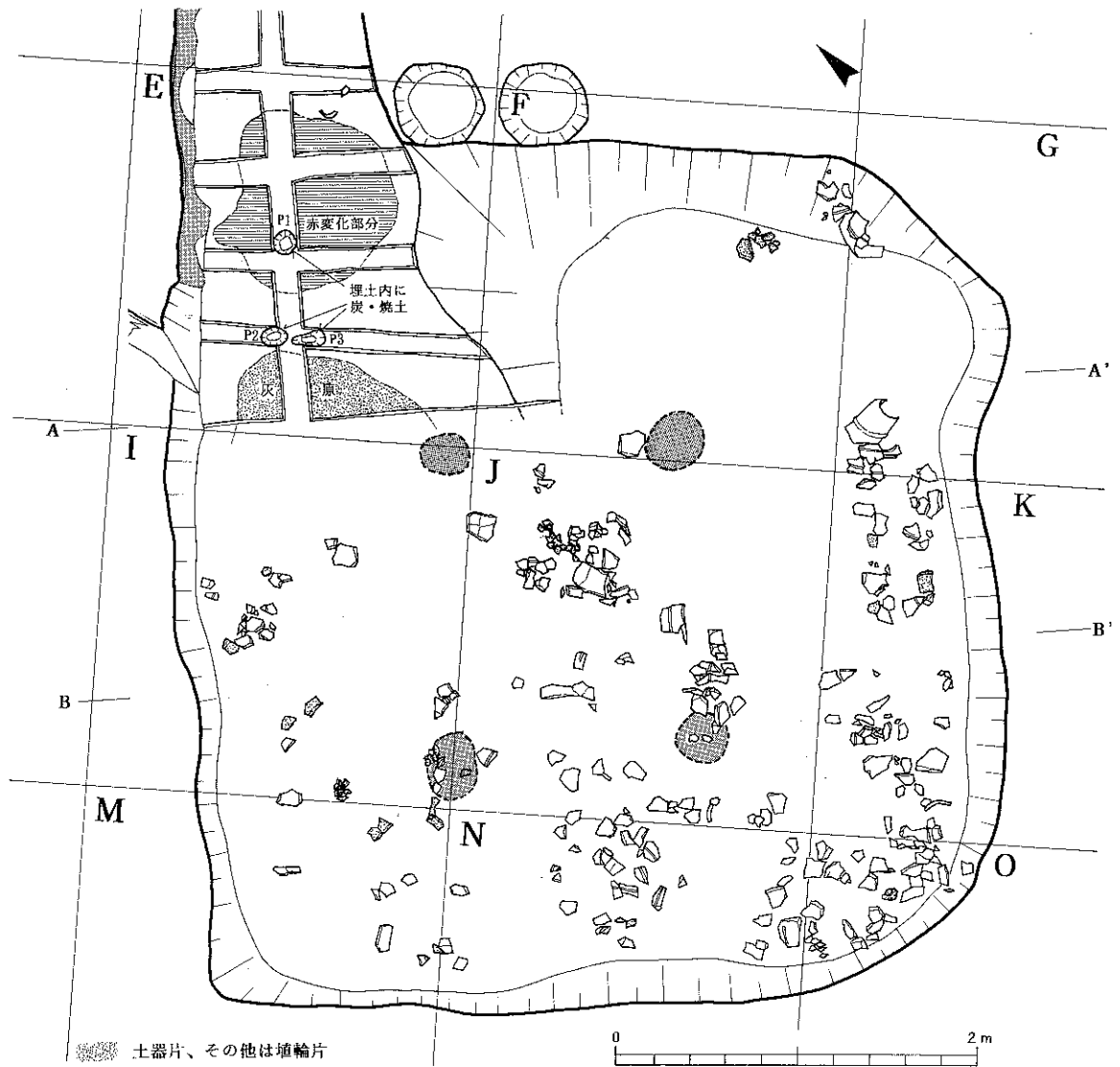
第12図 埴輪窯 S X 08 平面図・横断面図



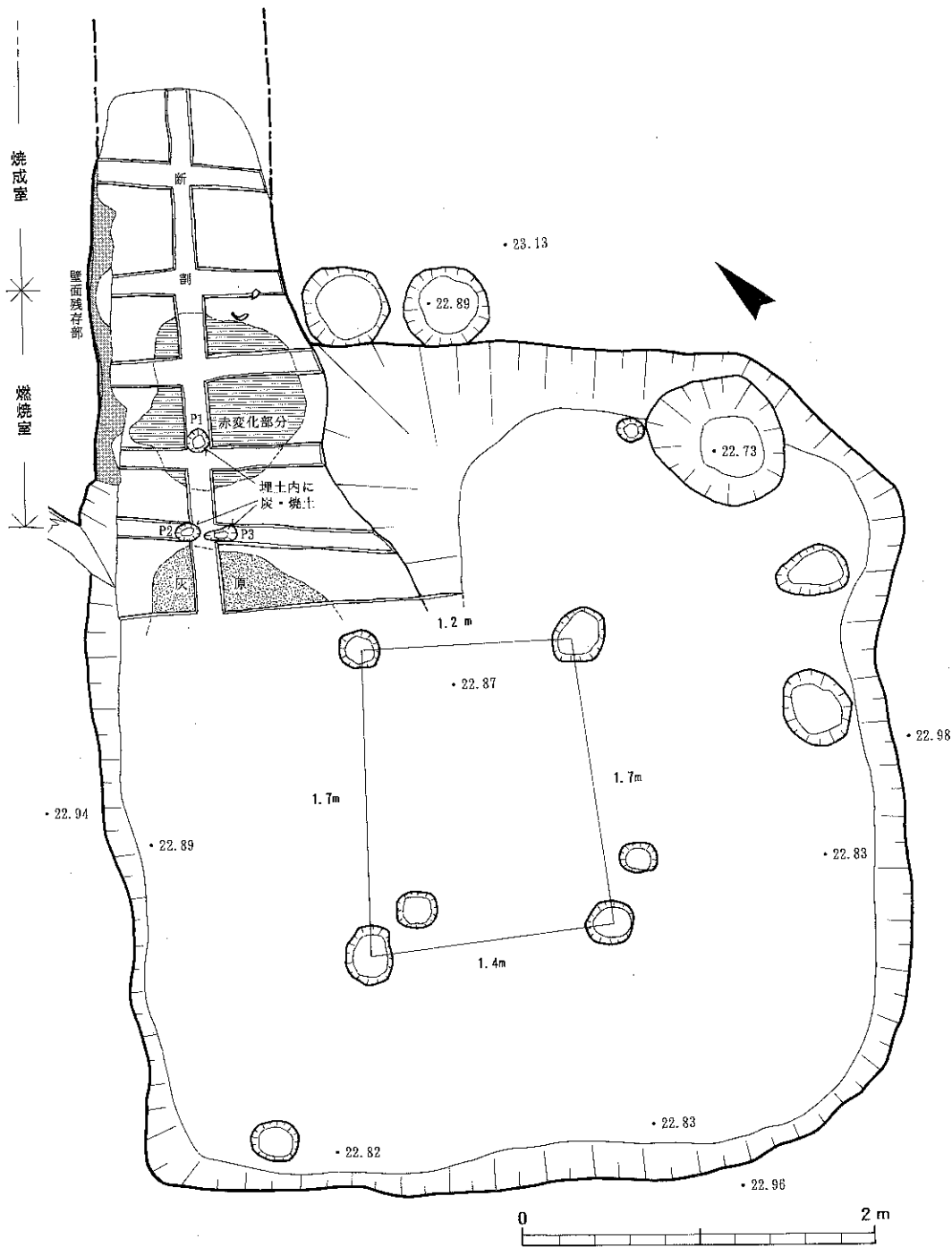
第13図 埴輪窯 S X08壁面部・天井部崩落状態（西から）



第14図 埴輪窯 S X08床面検出状態（南から）

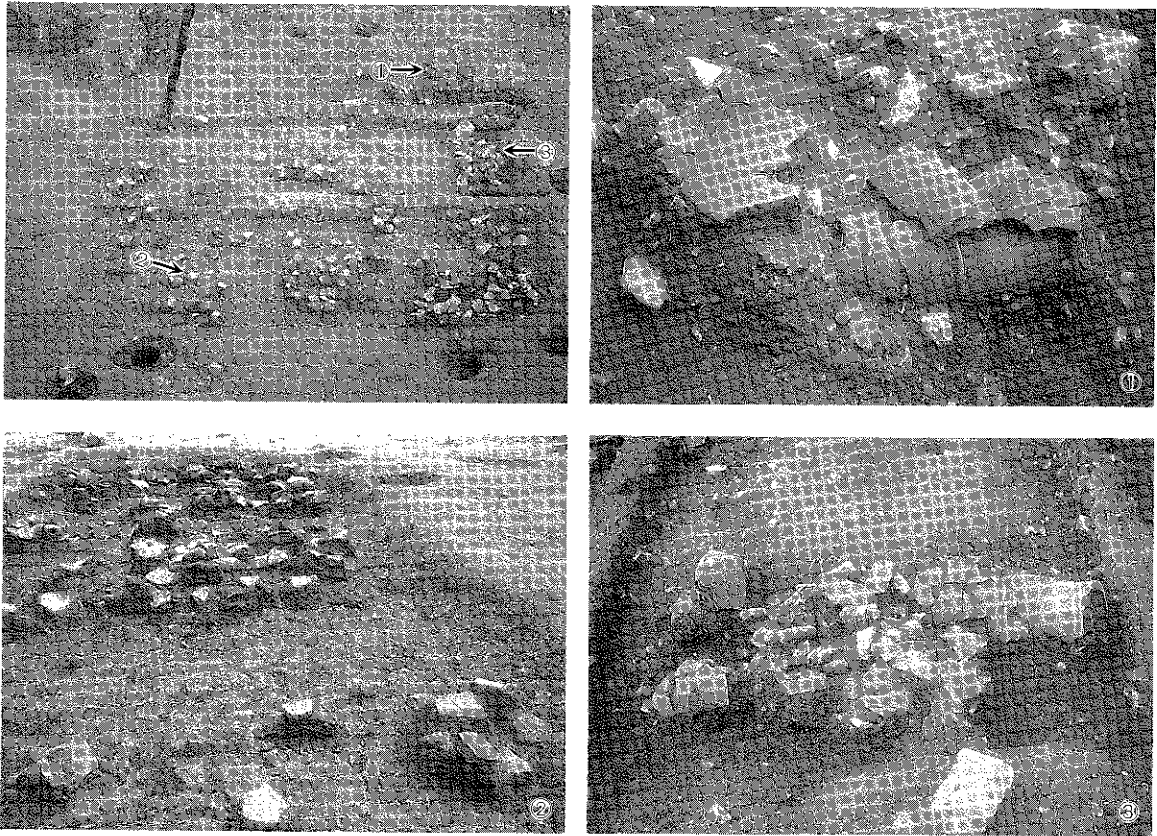


第15図 作業場S X09の遺物出土状況図及び埋土の土層断面図

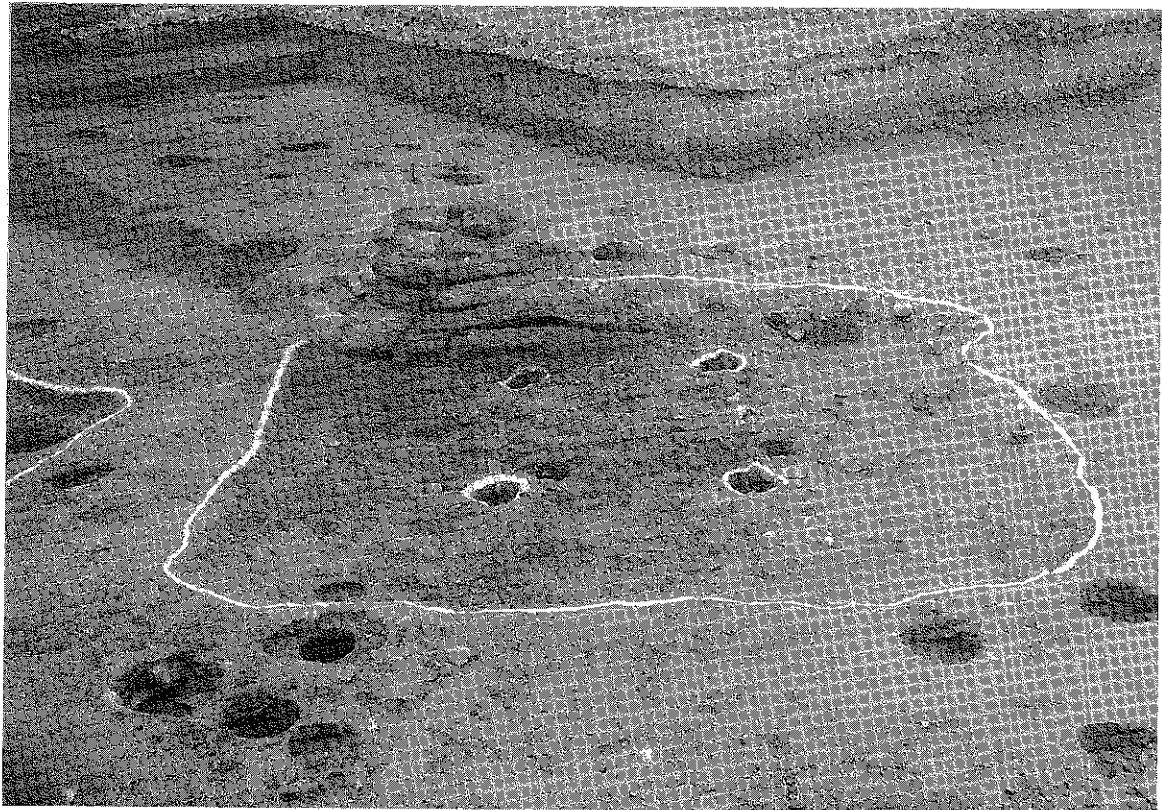


第16図 作業場S X09平面実測図（完掘）

ている。建物を支える4本の柱穴が確認され、覆い屋状の施設が存在していたと理解される。柱穴痕は直径35~40cm程の円形状を呈し、床面からの深さは20~30cm程を測る。柱間は南北間が長く1.7mを測り、東西間は1.2m、1.4mである。各柱間は非常に狭く、全体的に建物中央に寄っている。作業場の埋土そして床面上には埴輪・土器の遺物が散乱・混在して出土した。埋土は大きく2層に分かれる。いずれも砂質系の土である。埴輪窯より離れた南側から先に埋もれている。遺物はその先行する埋土内に比較的集中し、その状況は作業場の片隅に



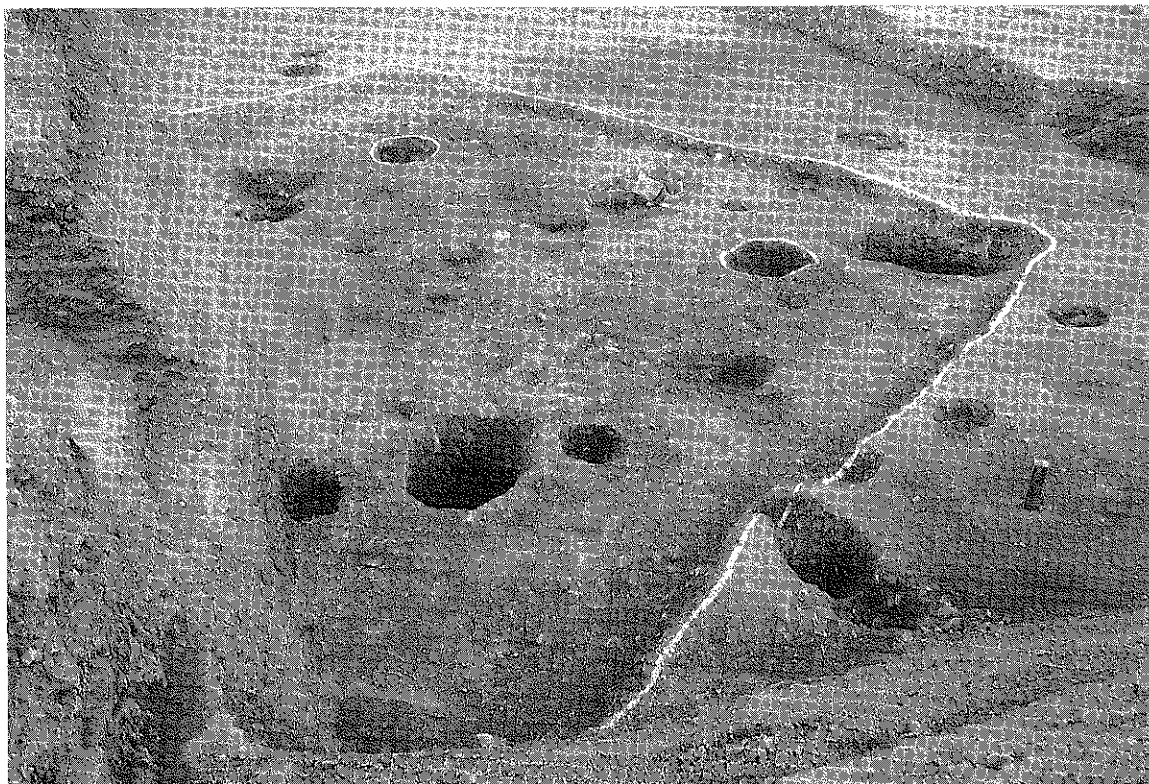
第17図 作業場S X09内の遺物の遺棄状況



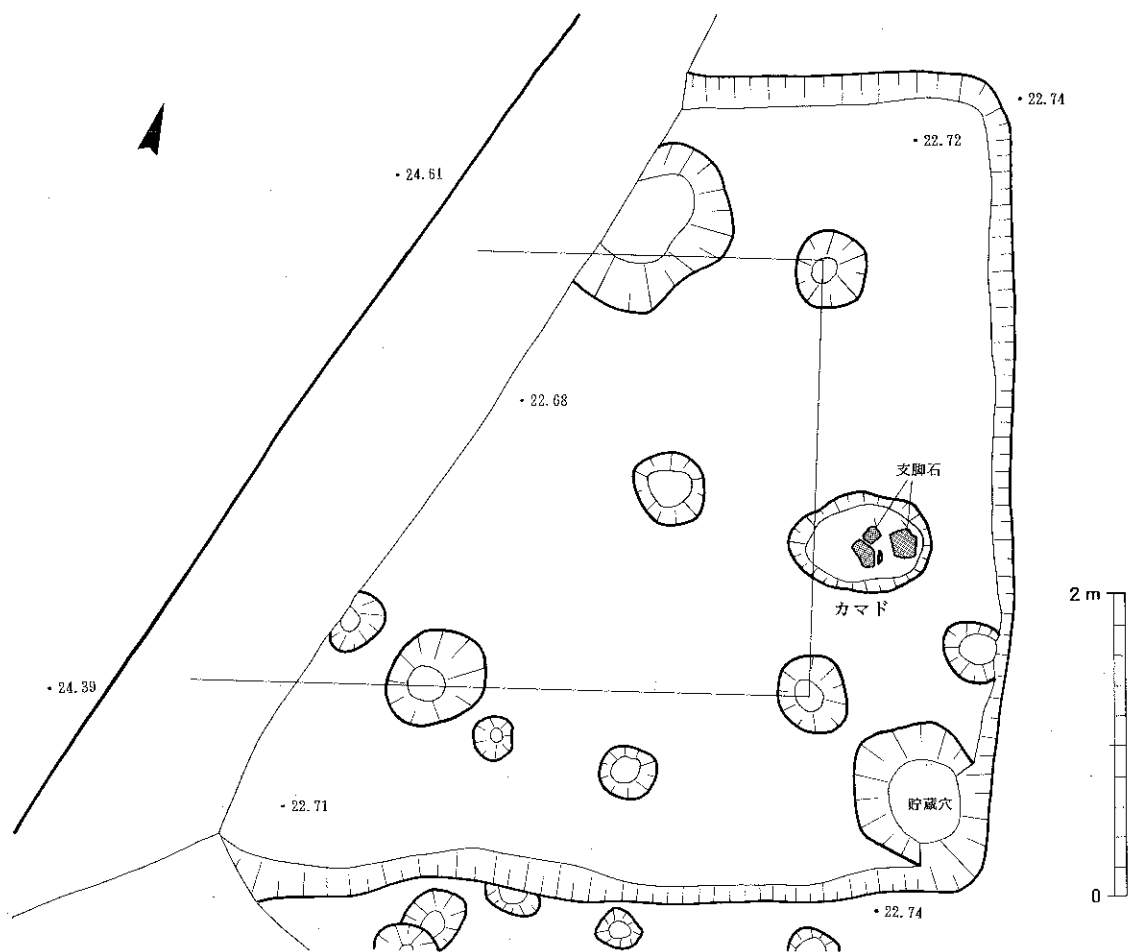
第18図 作業場S X09完掘状況（南西から）

廃棄した有様を物語っているようである。土器が割合に多く埴輪が少ない。

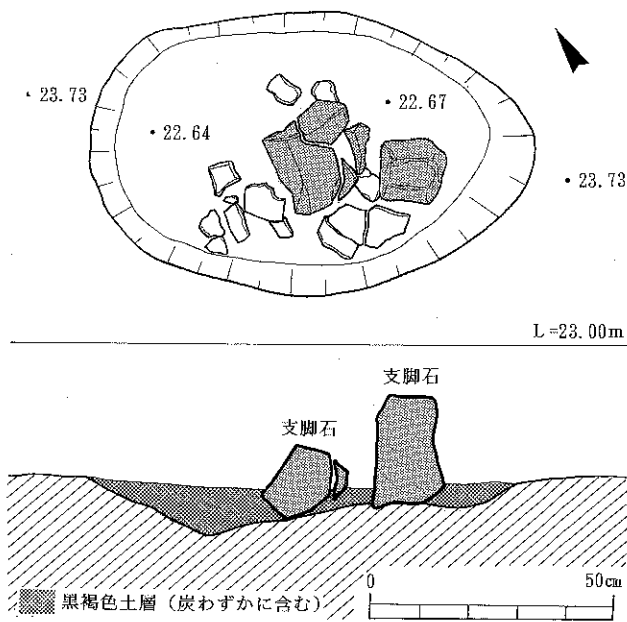
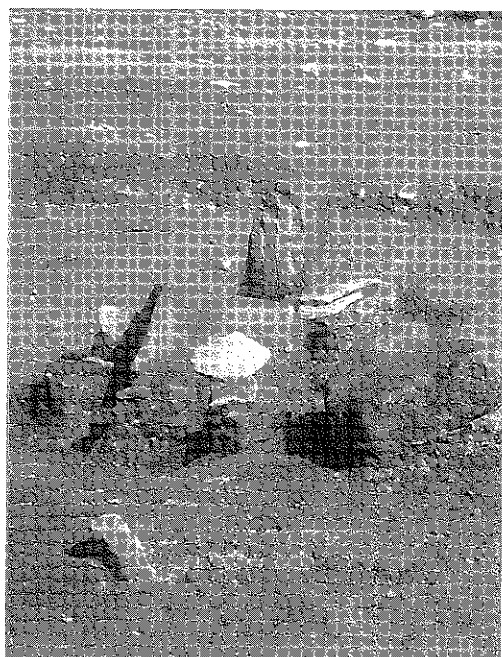
堅穴住居S B 10 (第19~21図) 埴輪窯S X 08の西側で検出した方形状の堅穴住居である。埋土や柱穴からTK208相当の須恵器(杯身蓋)が出土しており、埴輪窯と同時期の遺構と理解される。この建物は埴輪窯構築の際に臨時的に設置された付属施設ではないかと考えられる。全体の形状については、遺構がトレンチ西外に延びるため明らかではない。現状では南北間より東西間の方が若干幅広い。住居跡の壁高は現存で10cm程しかなく、残りは良くない。埋土は、基本的には褐色系の単一土層である。東側壁面側に近接して、そのほぼ中程にカマドが1基構築されている。カマドの床面は長辺90cm、短辺60cmの楕円形状の範囲を住居跡床面から5cm程掘り窪めて作り出されている。カマドの壁面及び煙道等の痕跡は全く認められなかった。床面上には薄く焼土層が堆積していたものの、床面には燃焼による赤変化した痕跡はほとんど見受けられないことから、短期間の使用や弱火による利用方法が考えられる。ここでは同時期に存在した埴輪窯S X 08の操業が短期間であることを踏まえ、カマドの状況も短期間使用の結果と考えたい。カマドの支脚石は2石あり、内1石はチャート質で、平坦な面を上面部にすえて立っていた。上面部のレベルは約23.90mである。もう一つは砂岩質系のもので破損が著しい。この石の上面部は平坦とはいえないが、支脚石として十分に使用に堪え得ること等から、支脚石として理解した。カマドは、支脚石をカマドの主軸上に並



第19図 堅穴住居S B 10全景(南西から)



第20図 堅穴住居S B 10平面実測図



第21図 堅穴住居S B 10カマド写真 (南西から)及び実測図

列するタイプとして認識される。上面部のレベルは概ね23.80mを測り、前述の支脚石より10cm程低い。支脚石周辺には甗が破片となって散在していた。甗は、底部に複数の穴を穿つタイプである。カマドの右手、住居跡の南東隅部に直径0.8m程の円形状の土壌があり、その中に口縁部から肩部にかけてほぼ完全な状態の甗片が口縁部を下に向けて出土した。この土壌の性格は、貯蔵穴の可能性が考えられる。また、住居跡を支える支柱穴の内の2つを確認した。直径0.5m程の円形状を呈する。

掘立柱建物 S B 01 (第22～24図) I区北東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.7m)以上、梁間3間(5.2m)を測る。柱掘方は、円形で直径0.65～0.7m。深さ0.24～0.4mを測る。堀方は心々間でみると1ヶ所だけが2.1mで、その他は概ね1.7mで合致する。建物の詳細な時期が分かる遺物は認められなかった。

掘立柱建物 S B 02 (第22～24図) I区の北西部、掘立柱建物 S B 01の西側で検出した南北棟の掘立柱建物。桁行3間(5.2m)以上、梁間3間(5.4m)を測る。堀方は心々間で概ね1.7～1.9mを測る。堀方は、円形で直径0.6～0.75mを測る。柱間の距離や柱穴や埋土状況等から掘立柱建物 S B 01と同時期の建物と思われる。

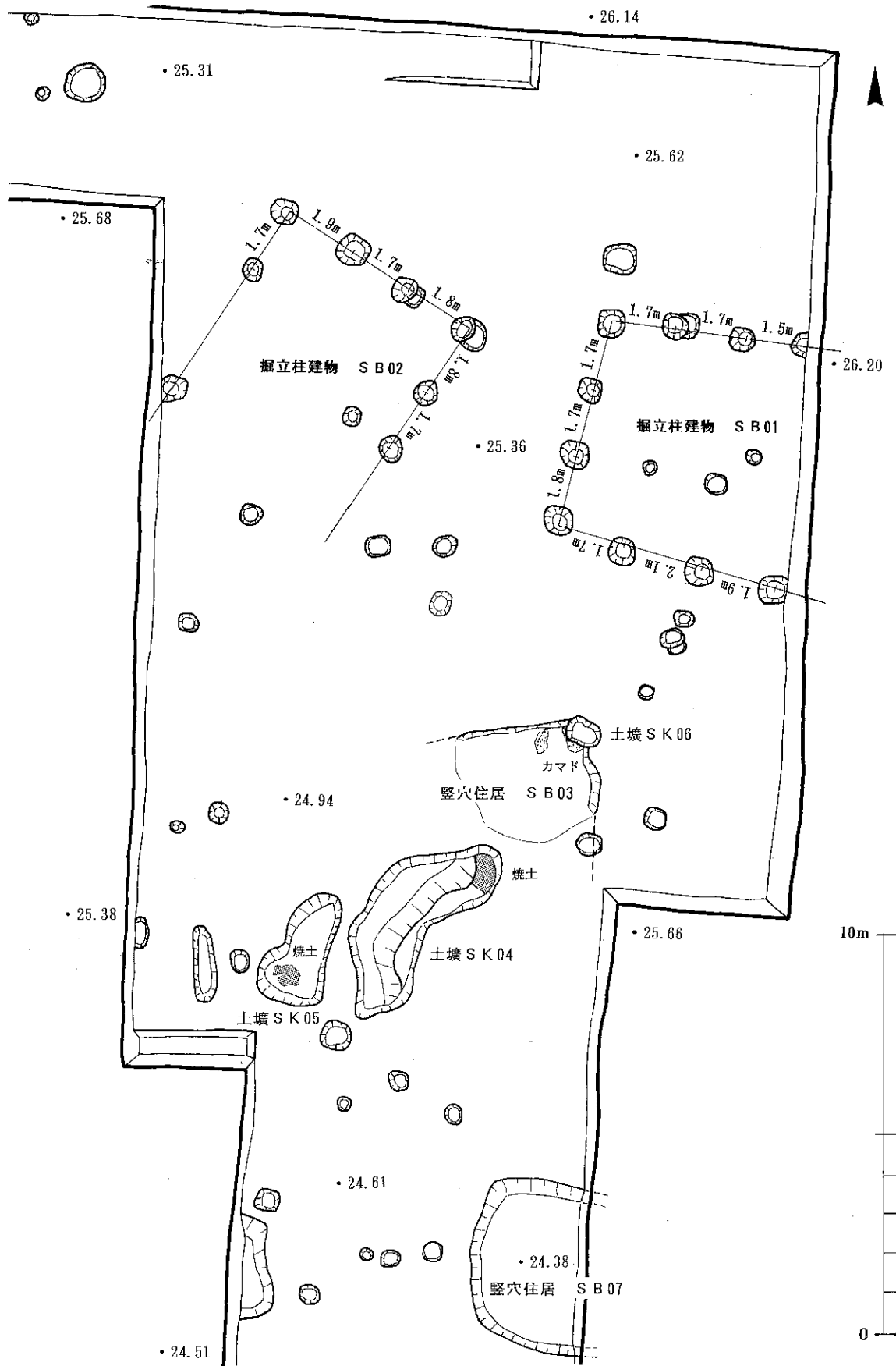
竪穴住居 S B 03 (第22・25図) I区掘立柱建物 S B 01・02の南側で検出された方形の竪穴住居。現存での住居跡の壁高は残りの良いところでも0.1m程しかなく、全体の規模は全く分からない。住居跡の東北隅部にカマド1基を付設する。カマド壁面は粘土をわずかに含むものの、基本的には土を付き固めて構築しているようである。燃焼部床面にはわずかながら被熱痕跡が認められる。

竪穴住居 S B 07 (第22・26図) I区の南東隅で検出された方形の竪穴住居。全体の4分の3を検出し、計測可能な南北間でみると直径は4.3m程となる。遺物は、住居跡の西側で破片ながら概ねまとまった状態で出土した。破片から数個体の存在が確認され、種類の明らかなものとして甗がある。壁高は残りの最も良いところで30cm程を測る。柱穴や壁溝等の建物に関連する遺構は全く認められなかった。

土壌 S K 04 (第22・27図) 竪穴住居 S B 03の南側で検出した不定形の土壌。土壌北端の床面に被熱痕跡がみられた。その箇所には土師器片が少量ながら付着していた。性格不明の遺構である。

土壌 S K 05 (第22・27・28図) 土壌 S K 04の西側に隣接して存在する南北3m、東西1.3m程の南北に細長い土壌。土壌南端の床面に土壌 S K 04同様に被熱痕跡がみられ、土師器片が付着していた。土壌 S K 04同様興味深い資料である。

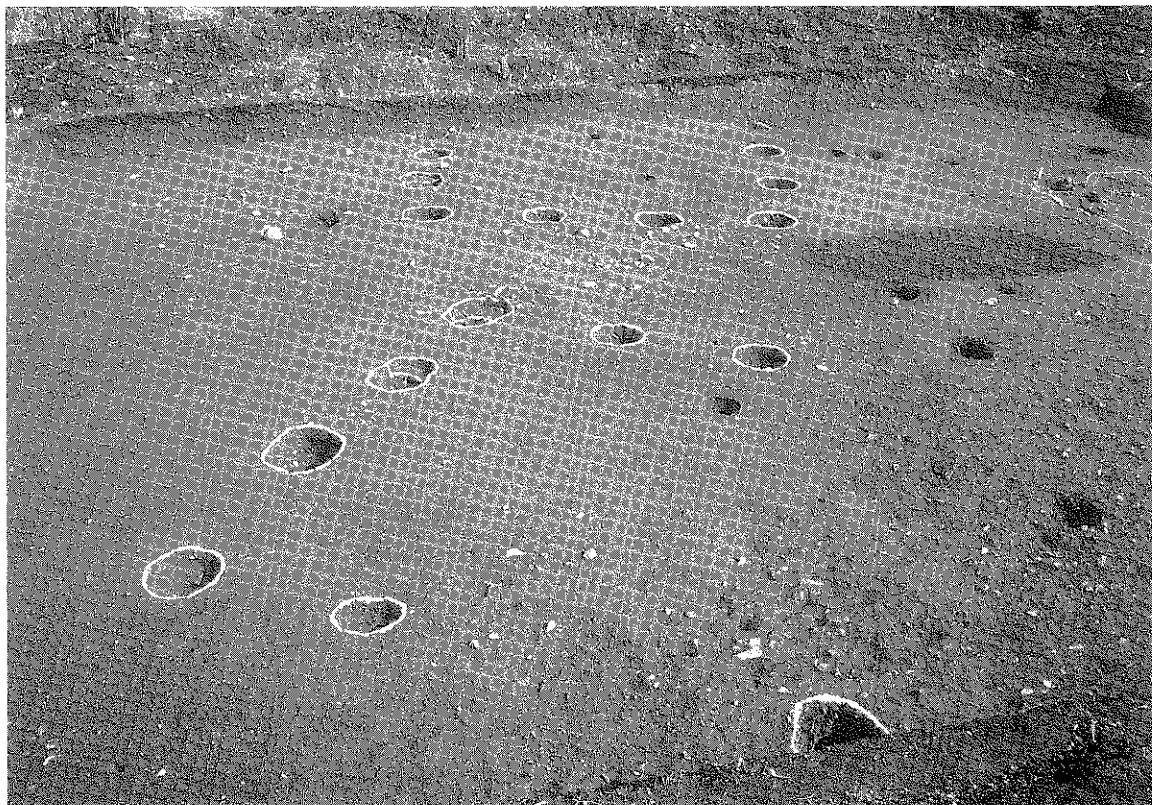
土壌 S K 06 (第22図) 竪穴住居 S B 03の北東隅で重複する遺構で、住居跡の方が先行する。直径0.5m程の小規模な土壌のハソウ2個体、杯身5個体が完全な形に近い状態でそれ



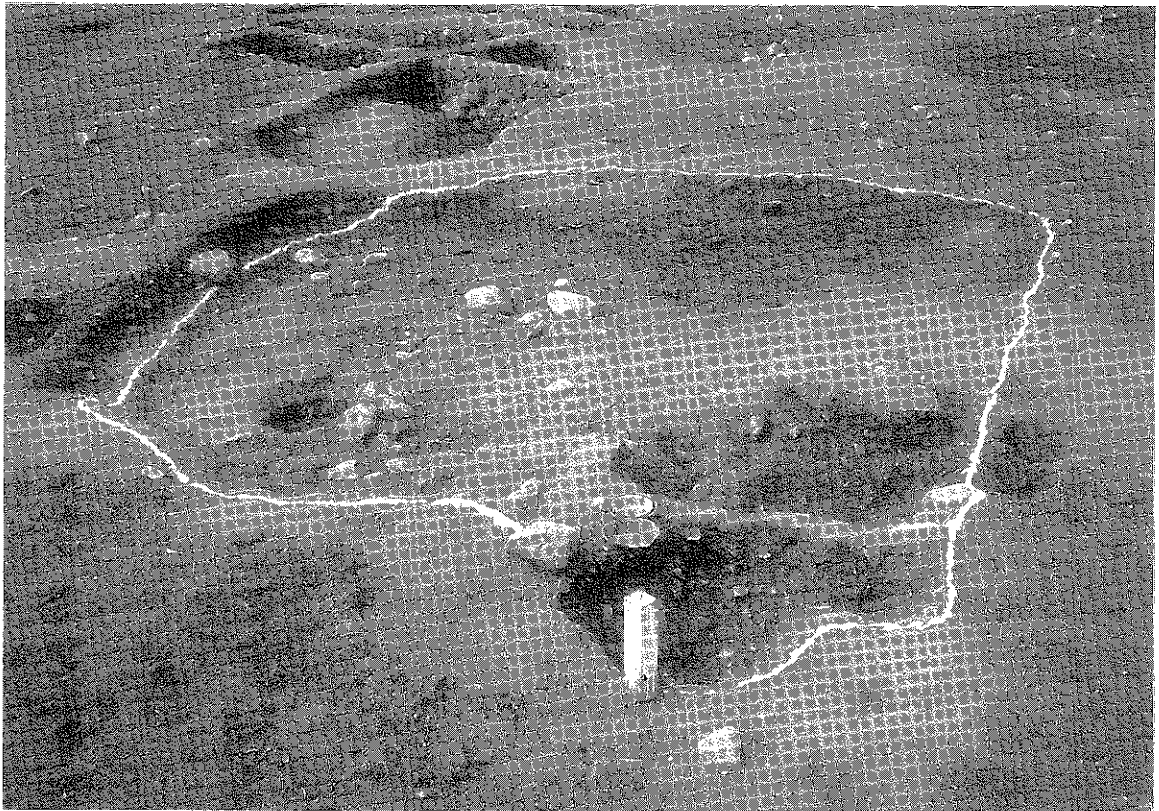
第22图 I区検出遺構平面図



第23図 掘立柱建物S B01・S B02全景（奥に見える竹林が大鳳寺跡・西から）



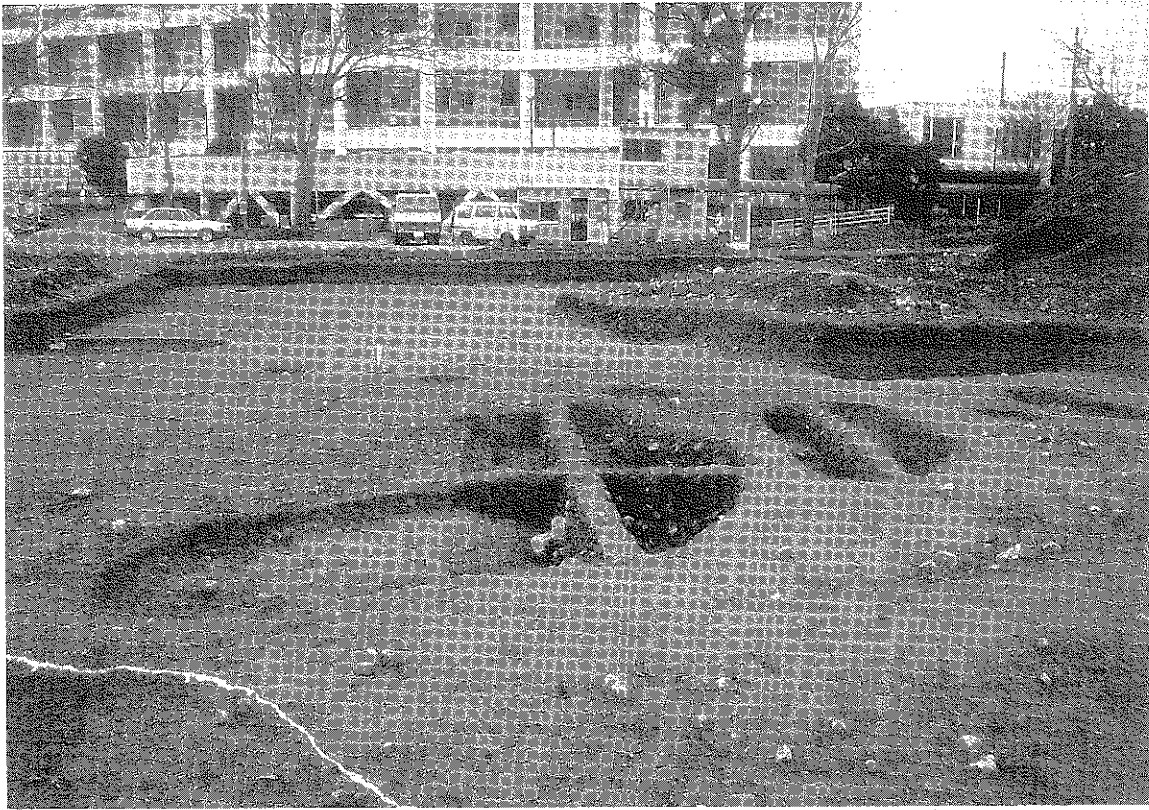
第24図 掘立柱建物S B01・S B02全景（西から）



第25図 堅穴住居S B03・土壙S K06全景（東から）

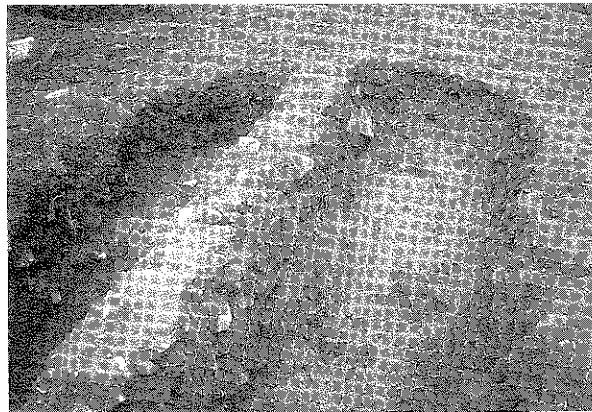


第26図 堅穴住居S B07全景（南西から）



第27図 土壙S K04・05全景（北から）

ぞれ出土した。遺物は、大きく土壙内で概ね2ヶ所にまとまっていた。いずれも土壙の上層付近から出土した。1つはハソウ2点、杯身2点のまとまり（土壙北東、第45図40・43～45）で、もう一つは杯身3点のまとまり（土壙南西、第45図39・41・42）である。遺物の残存状況からみて何らかの祭祀に関わる埋納遺構と考えられる。



第28図 土壙S K05の焼土痕跡

B. 2トレンチ

「コ」の字形の1トレンチに囲まれたエリアに設定したトレンチである。東西2.5m、南北1.7mの平面楕円形状の土壙S K12が確認された。底面は検出面から30cm程と浅い。土壙の上層付近から円筒埴輪片・馬形土製品・須恵器の甕片が出土した。遺物の内容から埴輪窯と同時期の遺構と考えられる。

C. 3トレンチ

2トレンチの西隣りに設定した小さなトレンチで、土壙（S K11）1つが確認された。土壙は、平面楕円形で東西0.8m、南北0.5mを測る。無遺物。時期不明。

V 出土遺物

今回の発掘調査では総計にして40箱程度に及ぶ遺物が出上した。その種類は、埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪）、土器、瓦類等があり、埴輪が最も多く出上する。時代的には古墳時代中期から中世までである。遺構的には埴輪窯S X 08に付設する作業場S X 09から最も多く遺物が出土している。ここでは今回の発掘調査で最も重要な遺構である埴輪窯を明らかにすることを目的とした整理を行うこととする。

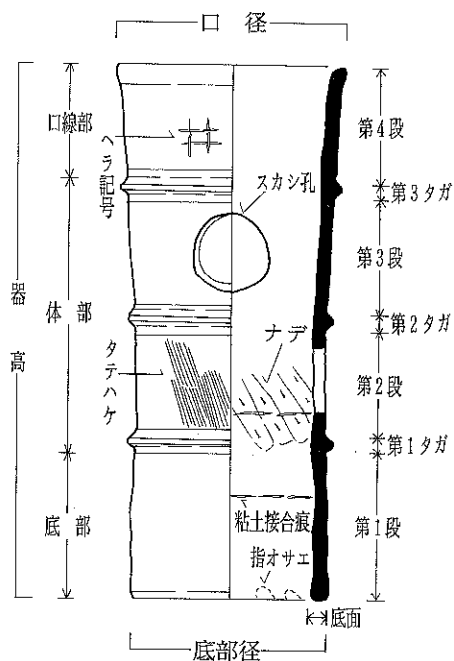
以下、埴輪窯に関係した遺物群を中心として、トレンチそして遺構ごとに遺物の概要を説明していくこととする。

A. 1 トレンチ出土遺物（第29～47図）

1. Ⅲ区出土遺物（第29～44図）

作業場S X 09出土遺物（第30～41図） 前章の検出遺構でも述べてきたように、作業場内の東側を中心として埴輪・土器が混在した状態で出土した。埴輪は埴輪窯で焼成され遺棄されたものであり、土器は工人達が使用した日常雑器類等が遺棄されたものと思われる。埋土は2層にわかれるが、土質や遺物の内容等からみて後世に混入されるような状況は認めがたく、これらは一括資料として理解される貴重な遺物群と考えられる。以下、埴輪・須恵器・土師器の順に各遺物の概要を説明していく。

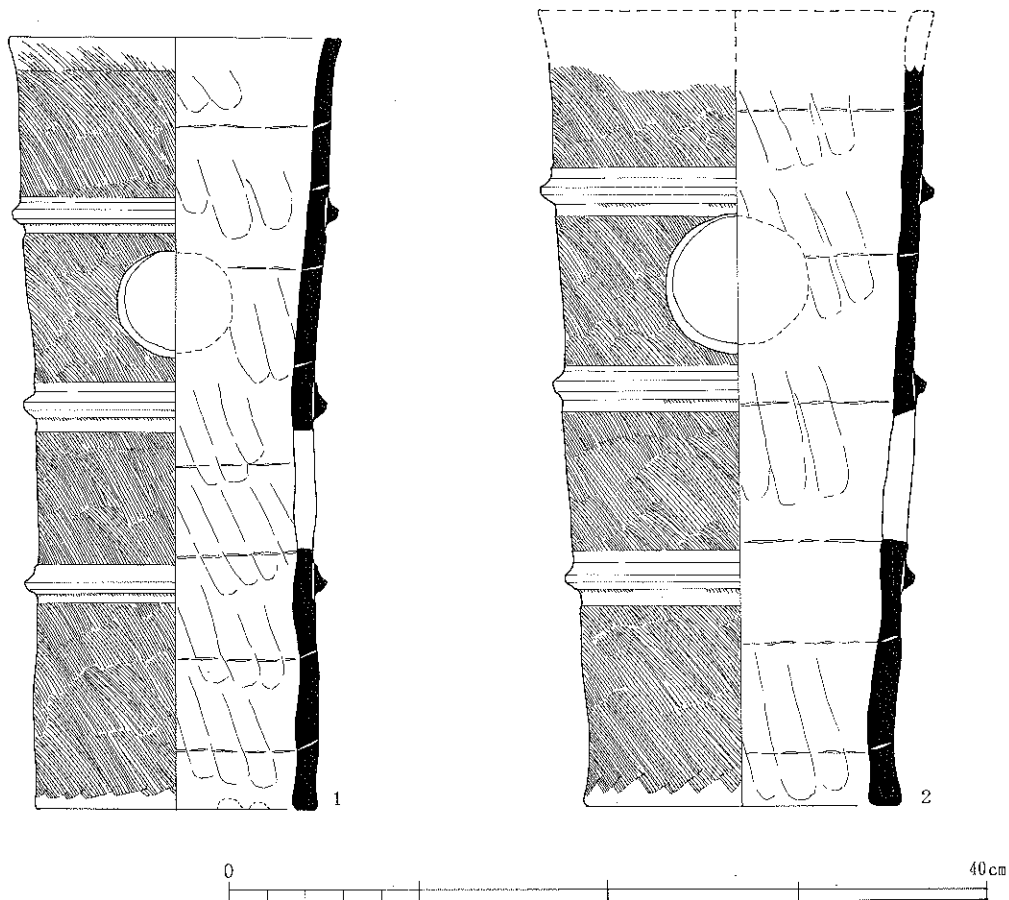
円筒埴輪（第30～34図） 埴輪で最も多く出土したのは円筒埴輪であるが、底部から口縁部まで全容が把握できるものは1個体（1）しかなく、全体が概ねで残っているもの（2）を加えても2個体にしかならず、その他はすべて破片の状態である。このため、ここで生産された円筒埴輪全体の属性を把握するには破片にみえる属性をも考慮に入れていく必要があり、それらを含めて分析を行った。質・量からおのずと限界があるが、属性については、概ね1タイプしかないであろうと判断した。ただし、ハケ原体の同定等についての分析が十分でないため、その詳細な分析による工人個々を含めたより詳細な問題にまで立ち入ることはここではできていない。以下、埴輪がもつ諸要素について順に述べていく。



第29図 円筒埴輪各部名称

部まで全容が把握できるものは1個体（1）しかなく、全体が概ねで残っているもの（2）を加えても2個体にしかならず、その他はすべて破片の状態である。このため、ここで生産された円筒埴輪全体の属性を把握するには破片にみえる属性をも考慮に入れていく必要があり、それらを含めて分析を行った。質・量からおのずと限界があるが、属性については、概ね1タイプしかないであろうと判断した。ただし、ハケ原体の同定等についての分析が十分でないため、その詳細な分析による工人個々を含めたより詳細な問題にまで立ち入ることはここではできていない。以下、埴輪がもつ諸要素について順に述べていく。

なおここで用いる各部分・調整技法等の名称につ



第30図 円筒埴輪実測図（赤褐色系）

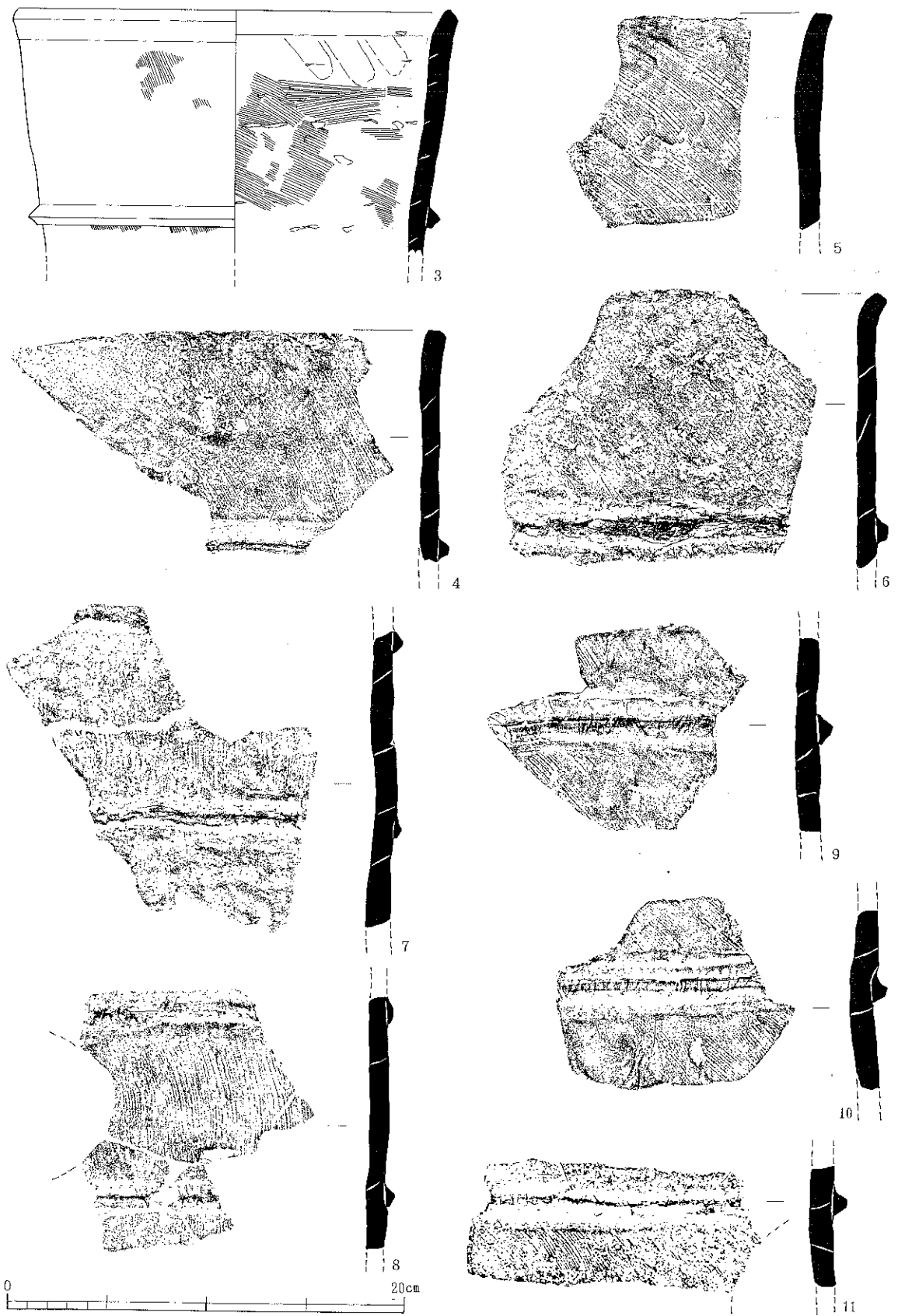
いては、川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」²⁾を基本とした。

器高 1しか明らかではなく、器高41cmを測る。2を見る限りにおいては器高は若干のばらつきがあるものと考えられる。

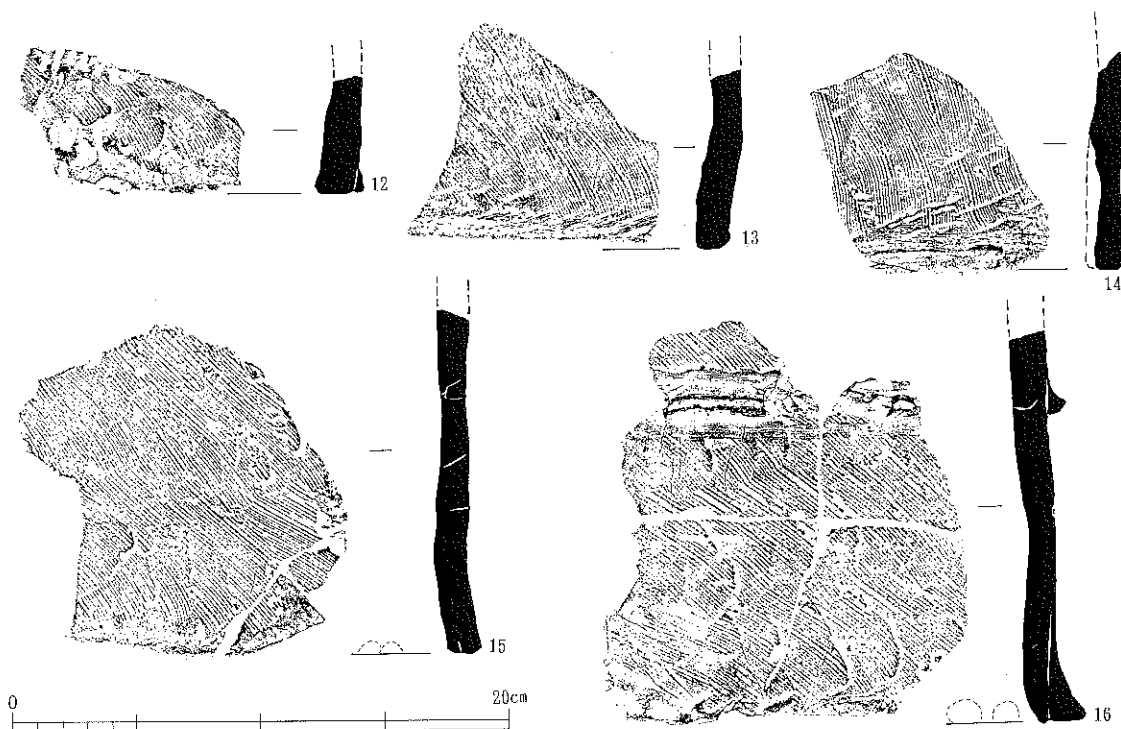
口縁部 口縁部は基本的には外反する。口縁部内・外面はヨコ方向にナデが施される。外面ではナデたところでもハケが比較的明瞭に残っていることから弱い横ナデであることが伺える。内面はタテハケが施されているものもみられる。口縁端部は、強いナデにより仕上げ、平坦面を作り出している。ナデの強弱の差で若干中窪みとなっているものもある。口径は1で18cm、3では21.8cmを測る。口縁部高（第4段目）は、



第31図 円筒埴輪（赤褐色系）



第32图 円筒埴輪実測図 (赤褐色系)



第33図 円筒埴輪実測図（赤褐色系）

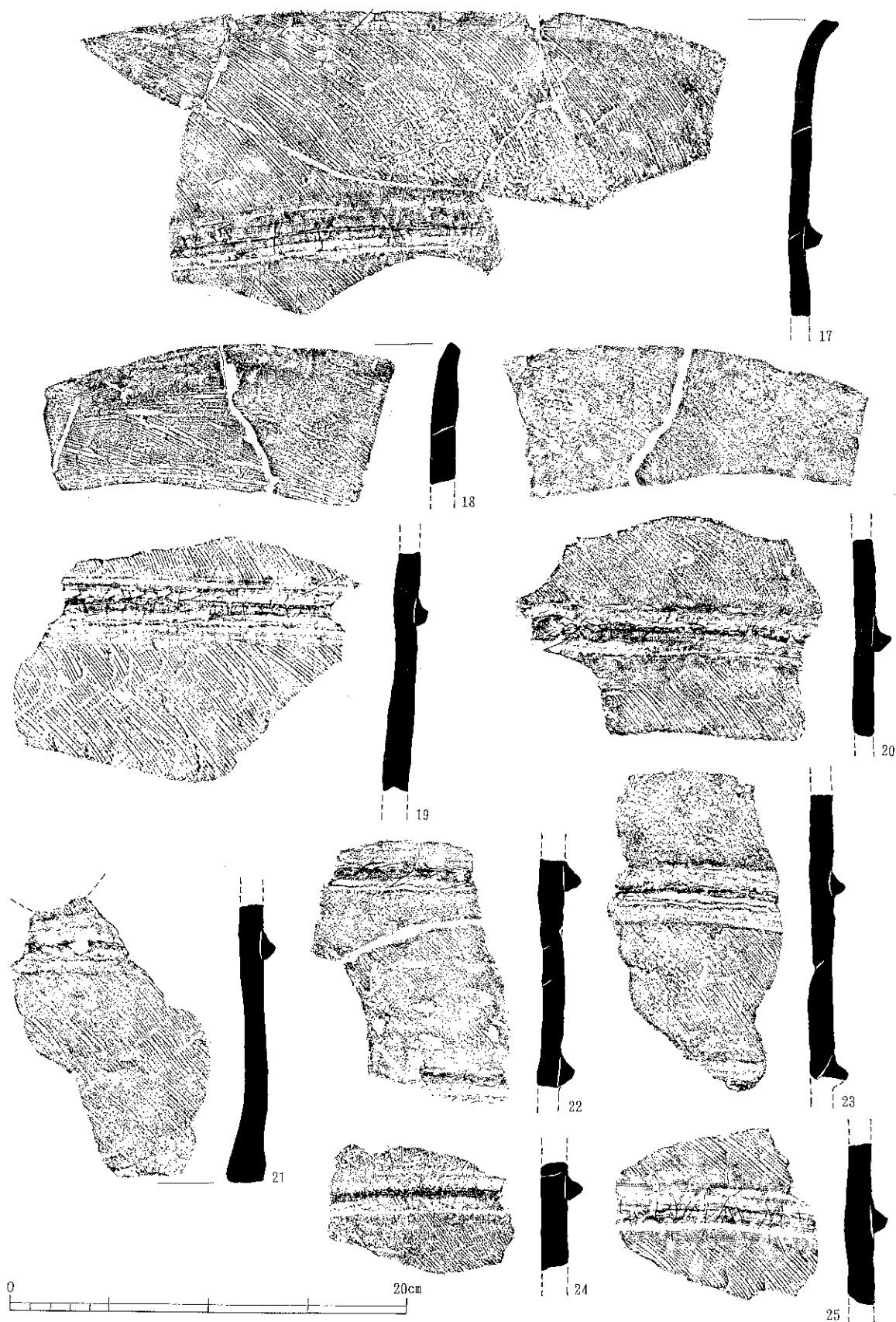
9.2cm~12cmとかなりばらつきがみられる。後述する口縁部以外での状況とは異なっている。

透孔・突帯 スカン孔の形は確認できる中ではすべて円形である。第2段目と第3段目に2孔ずつあり、外側から時計回りに穿孔している。突帯は、断続ナデ技法Aが想定できそうな突帯をもつ破片も1点見受けられるが、基本的には通常みられる貼り付け方法である。突帯は上辺は非常に丁寧にヨコナデによる調整がなされているが、下辺は軽くヨコナデしているために、突帯を貼り付けた痕跡が明瞭に残っている。突帯間隔は上下突帯の上辺から上辺の長さを基準として計測すると9.2cmもしくは10.4cmの2つの数値に集約された。このことは突帯間隔設定に2種類の工具が存在したことを示しているのだろうか。

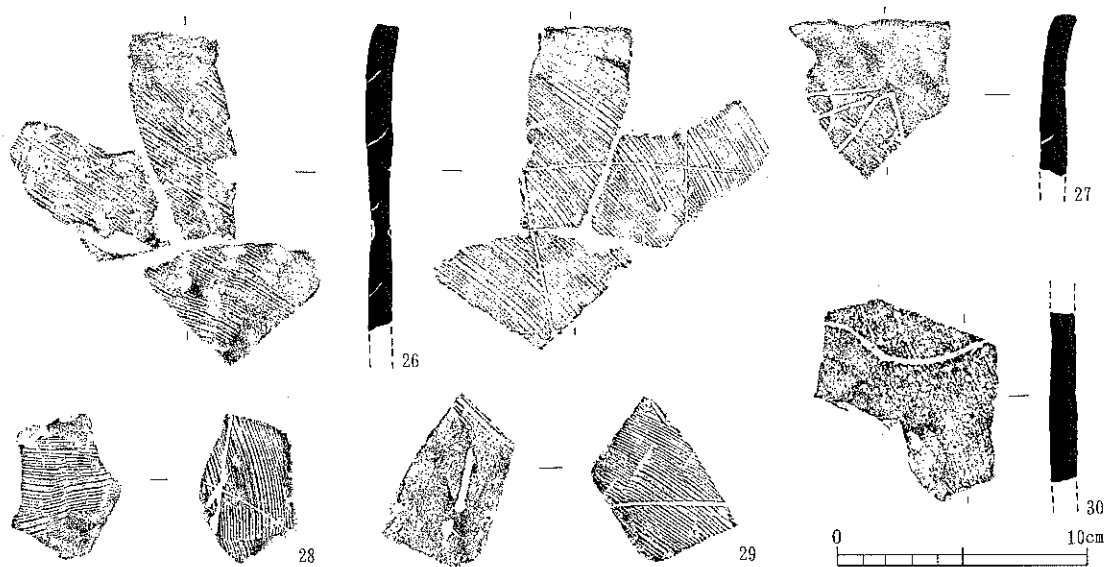
外面調整 極めて規則的かつ几帳面ともいえるタケハケによる調整を行っている。ハケは時計回りに巡っている。各段それぞれ2カ所にハケの入れる一定の水準といったものが原則として見受けられる。ハケは比較的短いストロークで行われているようである。ハケ原体についてはハケの重複が著しく容易に同定がし難い。

内面調整 下から上へ時計回りに指ナデが行われている。ナデも外面調整のハケと同じく規則的かつ几帳面に施されている。

底部調整 底部調整は基本的にはみられない。埴輪の規模が小さいために、底部調整をする必要性がなかったのではないかと考えられる。底部には植物状（藁か）の痕跡と棒状の圧痕がみられる。底部径は1が15cm、2が16cmを測る。底部高（第1段目）はいずれも12cm



第34图 円筒埴輪実測図（黄褐色系）



第35図 ヘラ記号のみられる埴輪片

と同一の値を示す。

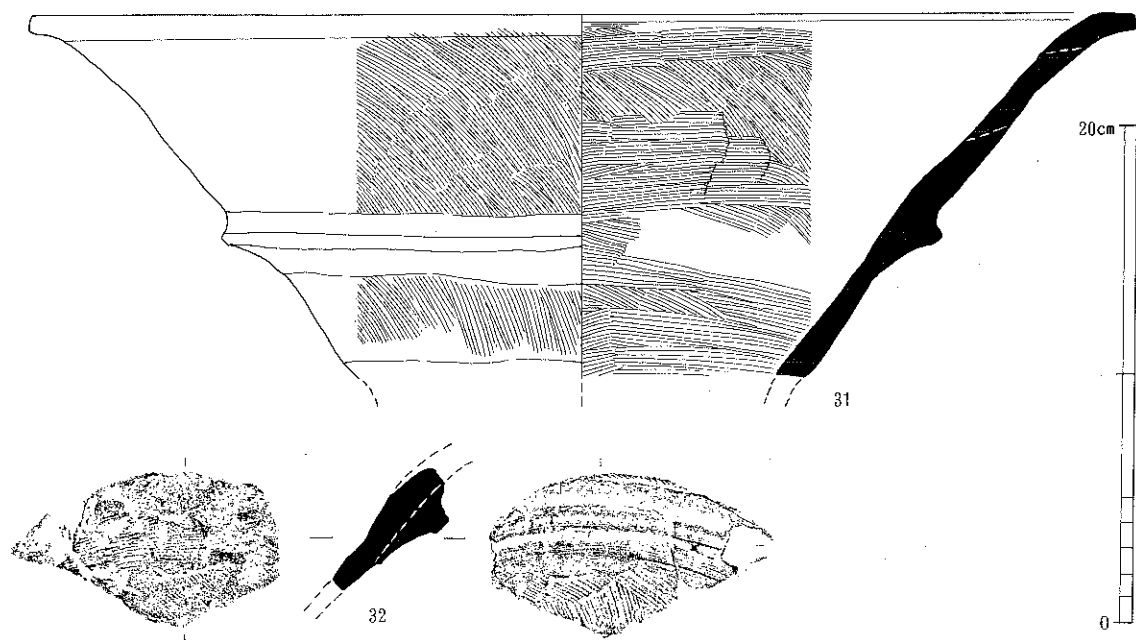
焼成と色調 焼成は比較的良好で硬質である。色調は基本的には赤褐色（第30～33図）と黄褐色（第34図）の2種類がみられた。部分的に青灰色の須恵質状となっているものや黒色状になっている破片が見受けられたが、おそらく窯内で置かれた地点による被熱割合が要因と思われる。

胎土 胎土は極めて精良である。

ヘラ記号を有する埴輪片（第35図） 出土した破片の中にヘラ記号が記されているものが5点見受けられた。いずれも断片であるため全容は伺い知れない。いずれも施文は外面である。26・27では口縁部に施されている。27は何等かの文様の一部を構成している可能性がある。26は格子状に刻まれ、比較的丁寧になされている。

朝顔形埴輪（第36図） 朝顔形埴輪は図示した以外には、数点の破片がみられたのみで量的には極めて少ない。口縁部から底部までの全形が復元可能な個体はない。破片はすべて赤褐色を呈する。ここでは比較的残りの良い31をもとに朝顔形埴輪の口頸及び口縁の諸特徴について述べていくこととする。

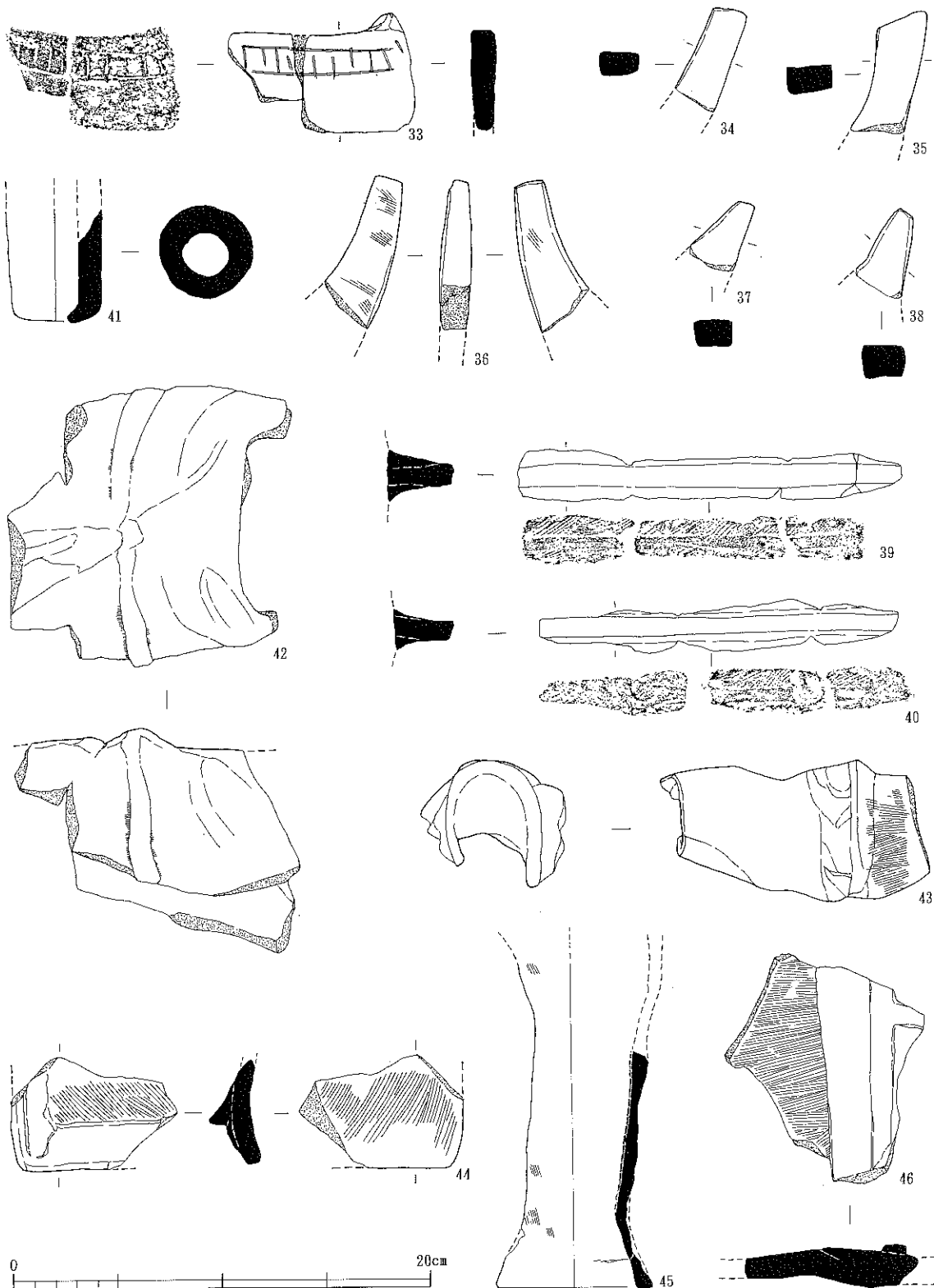
口縁部は外反しながら大きく開き、端部はナデによって外側にさらに屈曲させている。端部は明瞭な面を有する。口径推定43.6cmを測り、突帯部のありかたは、断面観察からみる限り、擬口縁状に作り出されたものと思われる。外面は、円筒埴輪と同じく左上方向にあげるハケ調整である。内面は左上方向に上げるハケ調整の後、ヨコ方向のハケ調整を行っている。



第36図 朝顔形埴輪実測図

形象埴輪³⁾ (第37・38図) 形象埴輪はコンテナ箱で計2箱分出土した。形象埴輪も細片が著しく全容を伺えるものは1点もない。総体的にはこの細片をもとにして想像し、可能な限り種類の同定をこころみた。このため今後評価が変わっていくことも十分に有り得る。以下、各遺物の諸特徴と想定される個体について述べていくこととする。

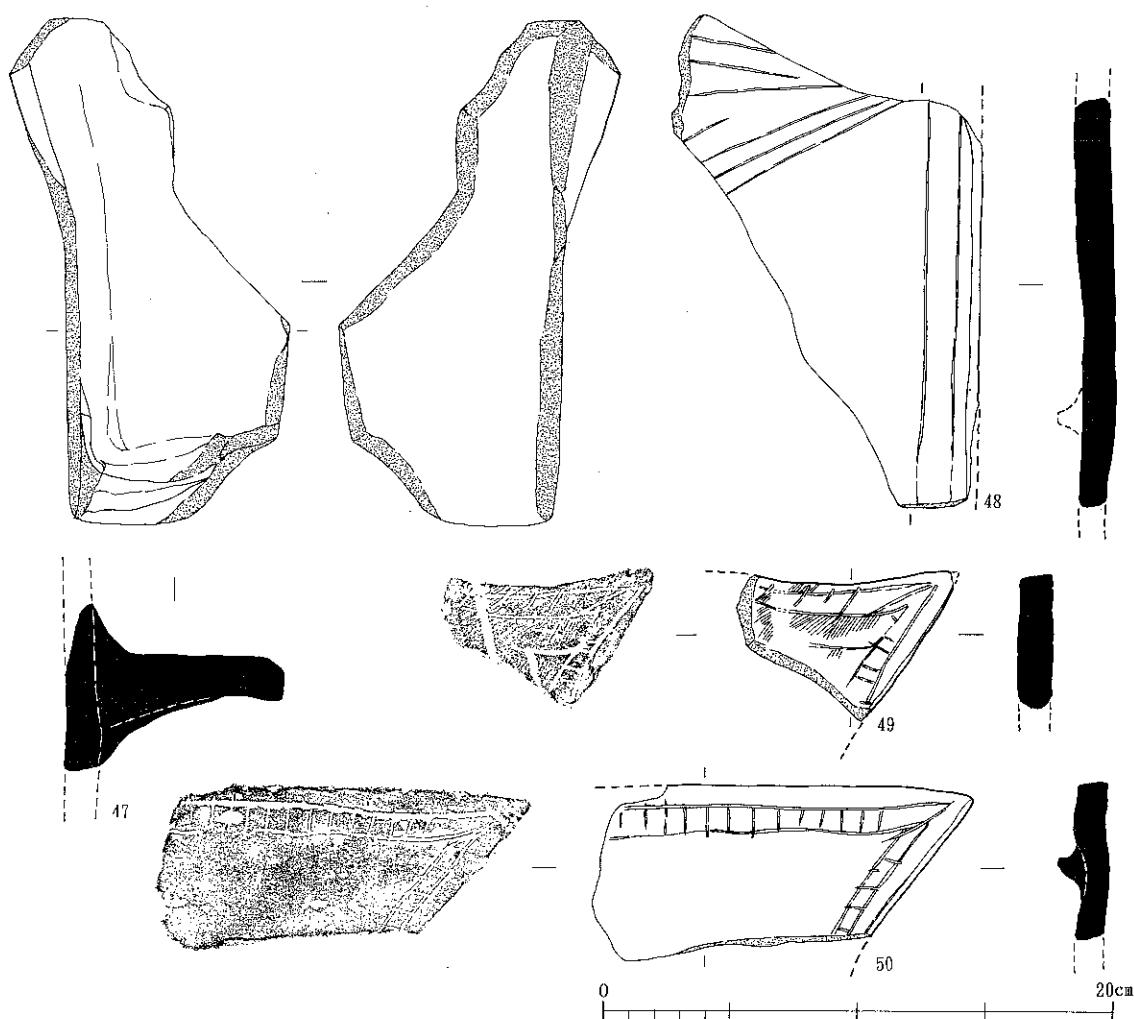
33は外面に格子状の線刻をいれたものである。内面にハケの痕跡がわずかにみえる。灰白色系。34～38は蓋形埴輪の立ち飾りの鱗部であると思われる。計5点出土している。蓋形埴輪の他のパーツは明らかではない。33は両側面にハケの痕跡が伺える。35は淡赤褐色、その他は淡黄褐色系を呈する。39・40は3 cm程に突出する突帯である。赤褐色。39では粘土紐を2重にして貼り付けた状況が伺える。家形埴輪の裾に取り付く裾廻り突帯になるのであろうか。41は中空の円筒状を呈する。動物の脚か。黄褐色。45は動物の脚部である。中空の円筒状を呈する。脚底は裾広がりとなり、蹄の表現がなされている。外面にはタテハケが顕著にみられる。淡黄褐色。他資料からみて馬の脚部ではないかと思われる。黄褐色。44・46は馬具の鞍が想定される。淡黄褐色。42は馬の尻部分の破片と思われる。この製品には当初馬具が装着していたようで、その剥離した痕跡が明瞭に残り、わずかに突帯1筋だけが残る。黄褐色。43は動物の耳部分と想定した。耳であるとすれば横方向に延びる形状と思われる。黄褐色。47～50は盾形埴輪の一部であろう。48は文様面に外区の輪郭を二重の線刻で画し、中に線鋸歯文を施するものである。裏面ナデ調整。裏面に突帯1条が貼り付いていた痕跡がみられる。49は文様面をハケ調整した後、格子状の線刻を行う。裏面ハケ調整。50は文様面をナデ調整した後、格子状の線刻を行う。裏面はナデ調整。裏面には突帯1条が貼り付く。



第37図 形象埴輪実測図(1)

土器 (第39~41図)

須恵器 (第39図 1~3・41図18) 杯蓋1点、杯身1点、甕2点の計4点が出土した。



第38図 形象埴輪実測図(2)

1は杯蓋で天井部のみが残存する。天井部は偏平で、回転ヘラケズリが施されている。灰白色。2は杯身ではほぼ完存する。口縁部はやや内傾しながら立上がり、端部は内傾する端面をもつ。机上復元で口径4.8cm、器高4.8cmを測る。外面は深く丸みを持ち、底部は回転ヘラケズリが施されている。陶邑TK208⁴⁾を前後する時期のものと思われる。3は甕の頸部である。その特徴は後述する2トレンチ出土の甕のそれと酷似する。18は甕で、全体の2/3程が残り、全体の形状が概ね理解できる。外反する口縁部に端部は面を有し、口縁端部下には凸線文を一条巡らす。口径24cmを測り、器高は50cm程に想定される。器壁は薄く6mm程である。体部最大径は中程よりやや上で47.5cmを測る。外面は平行叩きを施した後、回転カキメが施される。内面は同心円文当て具で押さえた後、スリ消しが施される。

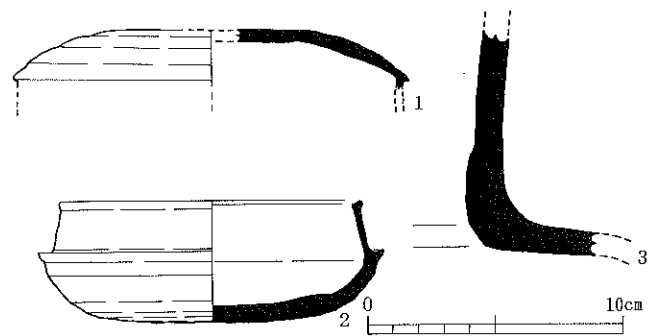
土師器 (第40図) 最も多く確認された土師器は口縁部の形状で認識しやすい甕である。口縁部はいずれも外反するもので、端部の処理によって丸くおさめるもの(9・12・13・16)、面取りするもの(5・6・7・10・14・15)、内面に肥行し内傾する端面をもつもの(4)

の3種類に大きく分別される。8・11は高杯の脚部である。8は脚が途中で屈曲して大きく外側に開き、端部を丸くおさめるものである。内面には絞り目がみられる。底径は13.6cmを測る。11も8と同形態であるが、端部は面を有する。底径は9cmを測る。この他、脚部と杯部の接地部の破片が数多く見受けられた。17は甑である。ほぼ垂直に立ち上がる口縁部にやや内傾する端面を有するものである。外面はタテ方向のハケ調整が施される。口径24.6cmを測る。

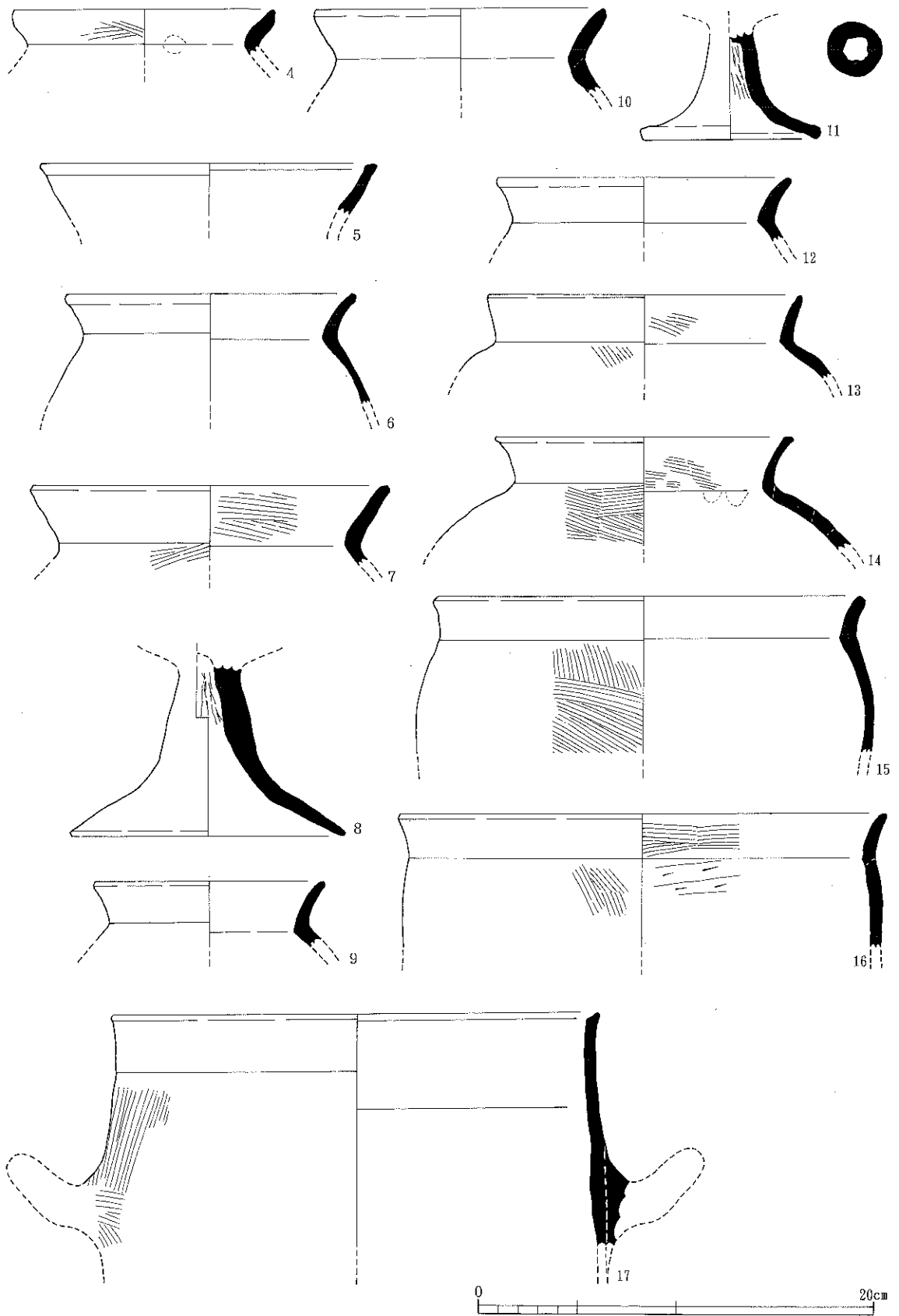
作業場S X 09周辺出土土器(第42図) ここで図示したものは、遺構面上で、遺存状態が良いために出土した位置や遺物の出土状況等のデータ取りができたものである。19は甕である。口径13.6cmを測る。緩やかに外反する口縁部に端部を丸くおさめるものである。体部最大径は概ね中程に位置するものと思われる。外面にはナナメ方向に粗いハケ、内面にはヨコ方向のヘラ削りがみられる。胎土は粗い。20は縄を巻き付けた工具によって土器の表面を叩きしめるいわゆる縄席文土器である。体部の破片しかなく全体の形状は不明だが、底部は丸底になるものと想定される。21は布留式の甕である。灰黄褐色、焼成良好。口径17cmを測り、器高は29cm程に想定復元される。口縁部はわずかに内湾しながら立上がり、端部は内面に肥厚し内傾する端面をもつ。体部は全体的に球形状と想定される。外面はナナメ方向のハケ、内面はヘラ削りが施される。

竪穴住居S B 10出土土器(第43図) 22は、須恵器の杯蓋である。口縁部はほぼ垂直に立上がり、端部は内傾ぎみの端面を有するものである。天井部は偏平で回転ヘラケズリが明瞭に認められる。天井部のほぼ中央に偏平なつまみがはりつく。口径12.1cm、器高4.4cm程を測る。23は須恵器の杯身である。口縁部は内湾ぎみに立上がり、端部手前で屈曲して外反するものである。底部には回転ヘラケズリが明瞭に認められる。机上復元で口径10.6cm、器高4.0cmを測る。22・23はTK208⁴⁾を前後する時期のものと思われる。24は、甕の口縁部である。外反する口縁部に、端部は明瞭に面を有するものである。外面は不定方向にハケ調整、内面は粘土紐の接合痕が顕著に認められる。口径は18.4cm程を測る。25は甑である。口径は28.8cm、器高は25cm程に想定される。

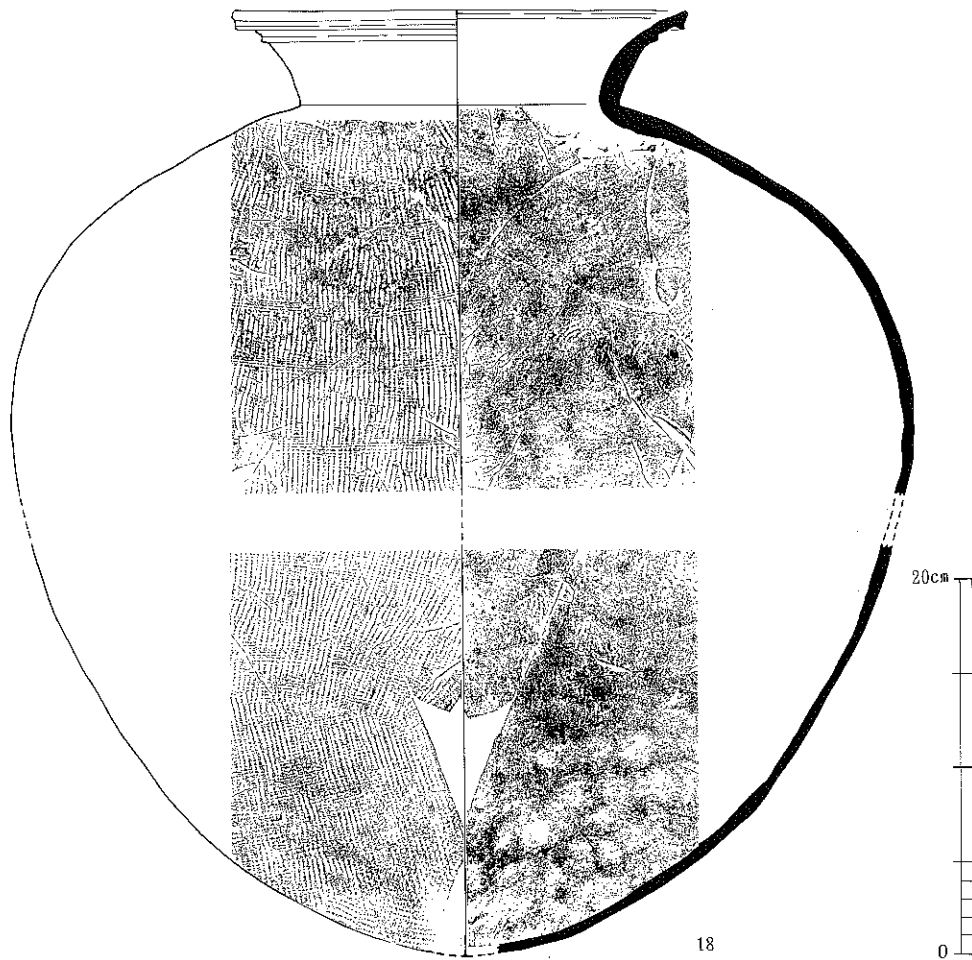
外面はタテ方向のハケ、内面はタテ方向のヘラ削りが施される。内面の口縁部近くにはヨコ方向のハケが施されている。底部に蒸気孔が一部確認でき、孔を複数もったタイプの甑と考えられる。26は土師器高杯の脚部である。脚が途中で屈曲して外側に大きく開き、



第39図 Ⅲ区作業場S X 09内出土土器実測図(1)



第40图 III区作業場S X 09内出土土器実測図(2)



第41図 Ⅲ区作業場S X09内出土土器実測図(3)

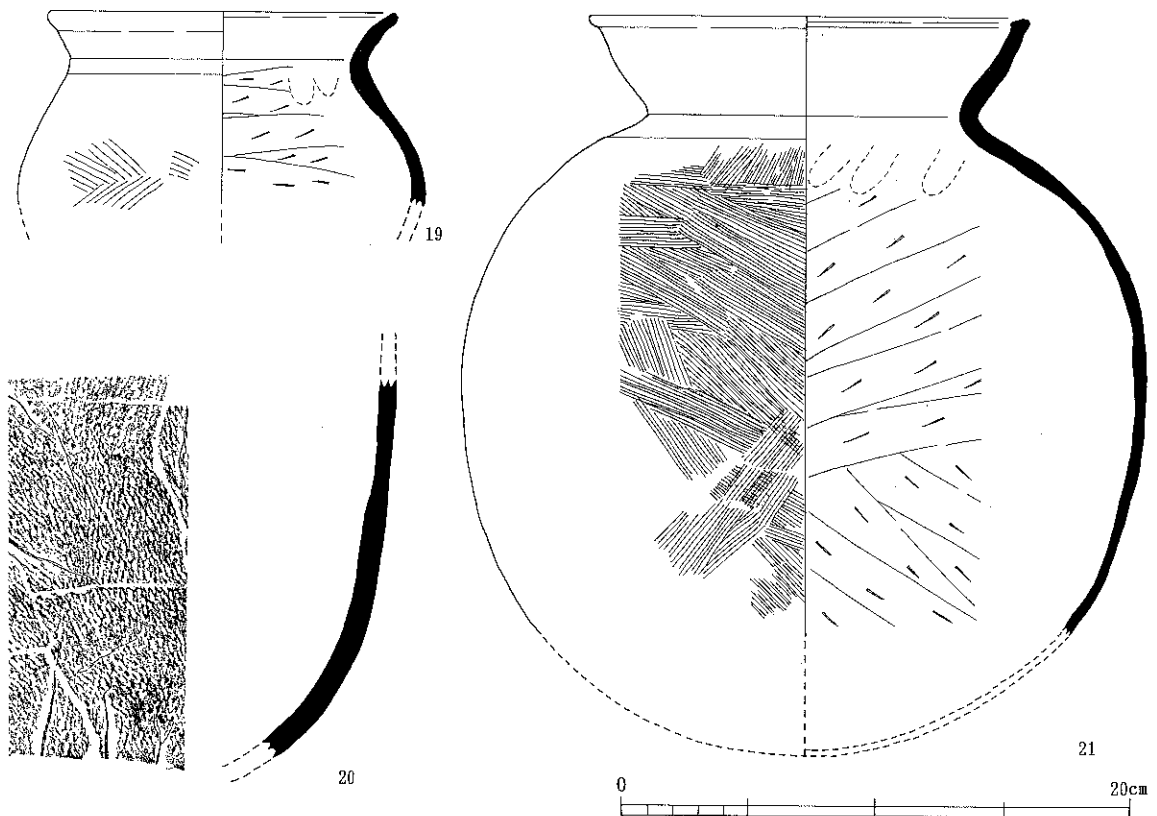
端部は面を有するものである。内面には絞り目が認められる。底径9.4cmを測る。

遺構面精査中出土土器（第44図） 27は須恵器の壺の口縁部である。外反する口縁部に端部は面を有するものである。端部下には波状文が施されている。29は須恵器高杯の脚部である。脚部が裾広がりになり、端部は面を有し、端部上に一条の凸線を巡らすものである。スカシ孔は長方形で一段である。机上復元で底径10.4cmを測る。30・31は土師器の高杯である。いずれも内面に心棒状のものをさして杯部と脚部を接合した痕跡が認められる。31は外面にはタテ方向のケズリが伺える。32は中実の断面形が円形状を呈する上向きの把手である。甌の把手か。33は土師器の甕の口縁部である。外反する口縁部に端部を丸くおさめるものである。机上復元で口径11.8cmを測る。34は須恵器の杯蓋である。口縁部は直線的にほぼ垂直に立ち上がり、端部は面を有するものである。天井部は偏平で回転ヘラ削りが認められる。机上復元で口径12.4cmを測る。28・35は須恵器の杯身である。断片であるため全体の形状は伺いがたいが、口縁部の立ち上がりが短いタイプのもものと判断される。36は緑釉陶器の皿である。体部はゆるやかに外傾しながら立ち上がり口縁端部は丸くおさめるものである。有段の輪高台

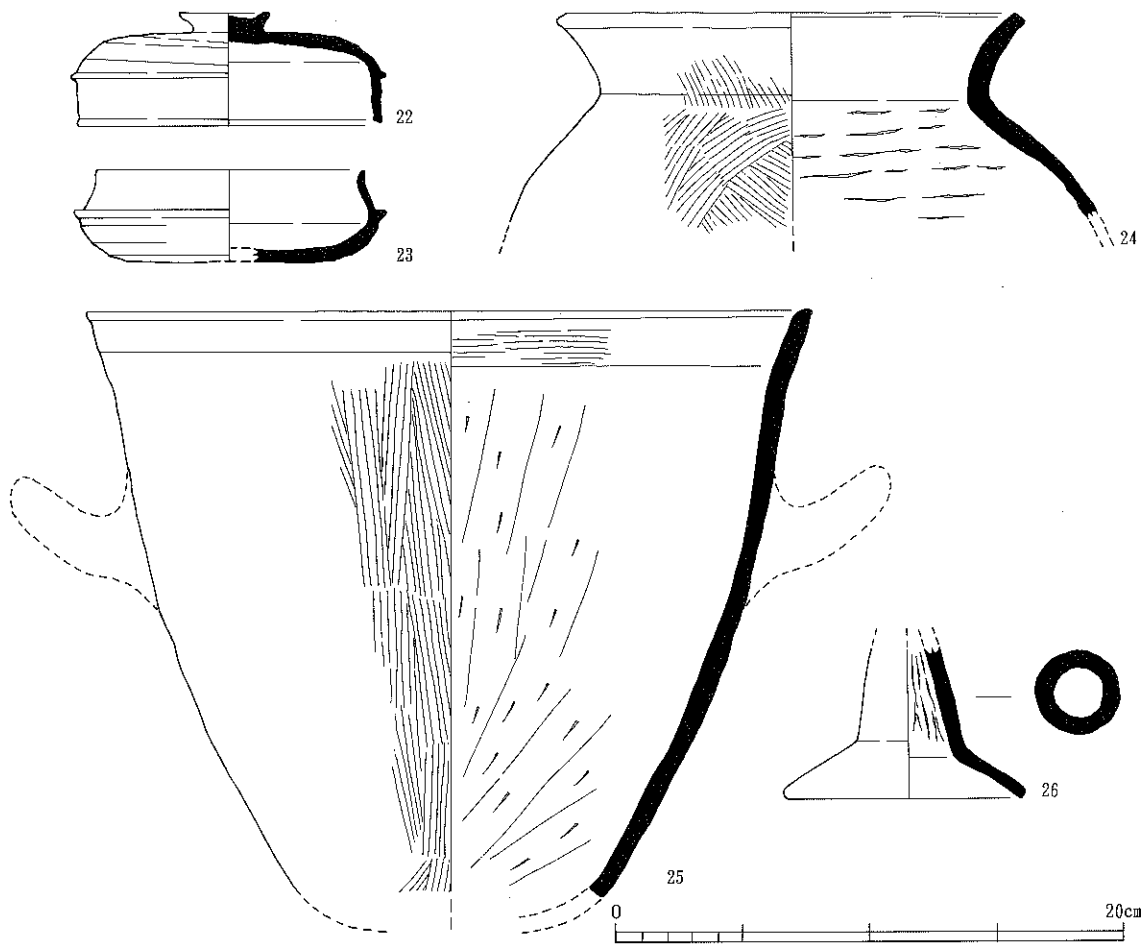
を貼り付ける。机上復元で口径11.6cm、高さ2.7cmを測る。9世紀後半頃。37は、内黒でミガキが施される黒色土器A類の椀であろう。底部に断面三角形の輪高台を貼り付ける。机上復元で底径8.4cmを測る。10世紀代。38は口縁部が「く」字状を呈する瓦質の鍋の口縁部である。机上復元で、口径26.6cmを測る。

I区出土遺物（第45～47図）

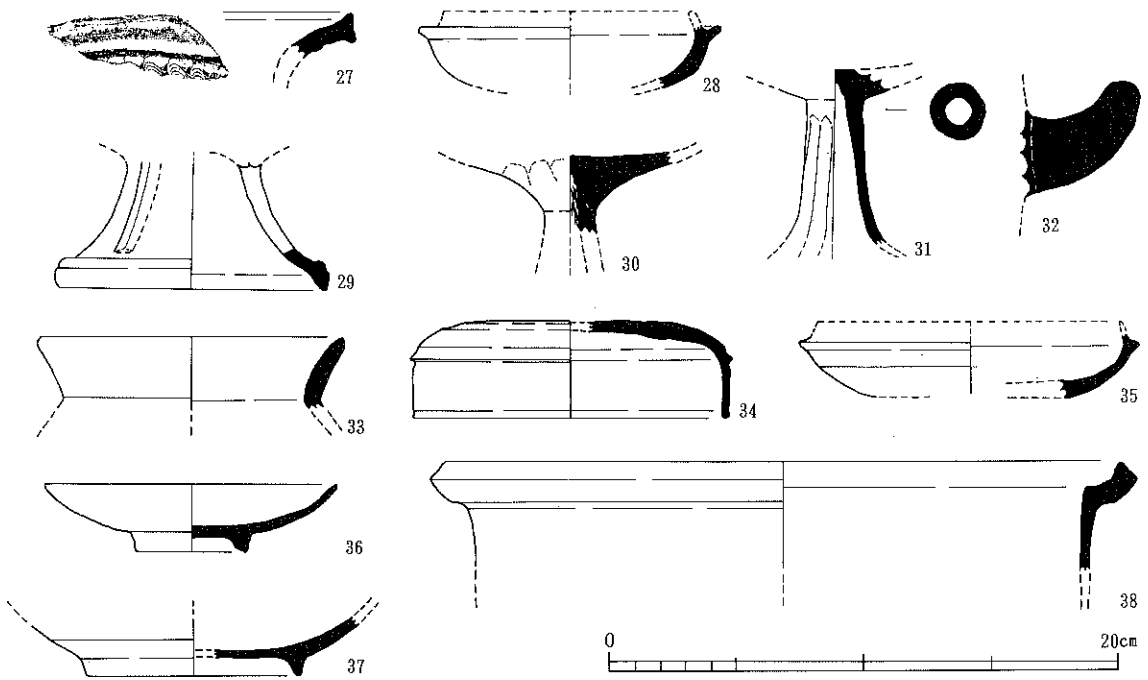
土壌SK06出土遺物（第45図） 土壌内より杯身5点、平瓶2点がまとまって出土し、何らかの祭祀に関わったと想定される資料である。杯身には高台付きのもの（41）とないもの（39～43）とがあり、前者は口径13cm、器高4.4cmを測り、後者は器高は3.5cm～4cmで、口径は10cm（39・40）と12cm（42・43）の2種類に分けられる。杯の形状・製作手法は同一であり、外反して立ち上がる口縁部に端部を丸くおさめるものである。底部は回転ヘラ切り未調整で、内・外面ともに回転ナデによる調整で仕上げられる。平瓶は形状・製作技法がそれぞれ異なっている。44は全体の1/2（下半部）が残存し、上半部は欠失し不明である。肩部は比較的明瞭な稜を有する。胴部の最大径は18cm程に推定される。底部は平坦で、径11cm程を測る。体部下半と底面はヘラケズリによって仕上げられている。45は口縁部が欠失する以外は完存状態である。肩部は比較的明瞭な稜を有する。胴部最大径は18cmを測る。底面は平坦で、径は9cm程を測る。底面は未調整である。胎土は粗い。いずれも7世紀後半頃のもの



第42図 III区作業場SX09周辺出土土器実測図



第43图 III区竖穴住居S B10出土土器实测图



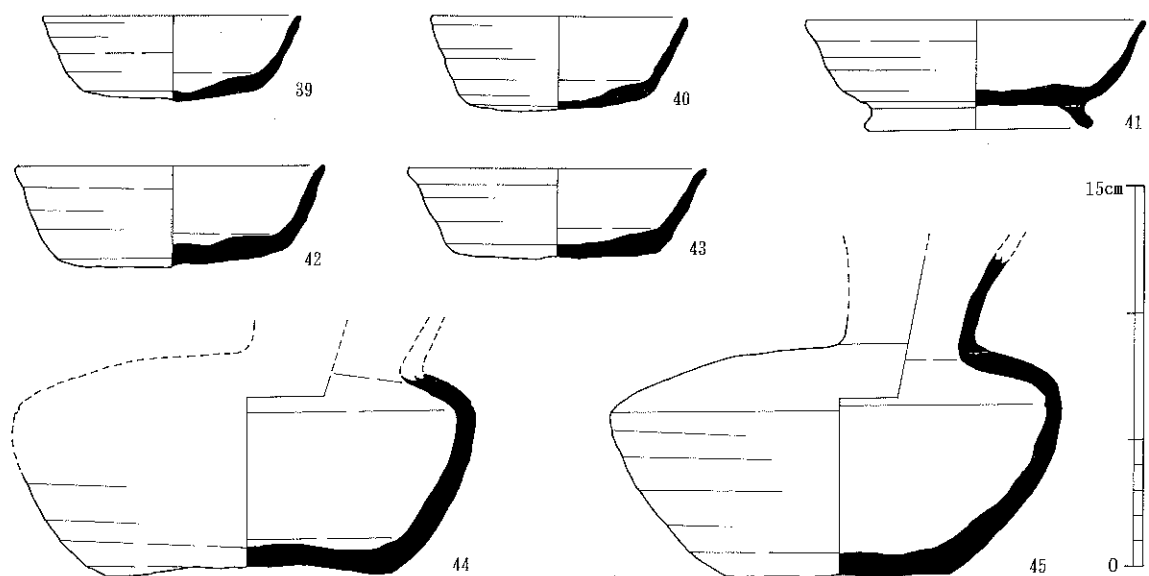
第44图 III区遺構面精査中出土土器实测图

と思われる。

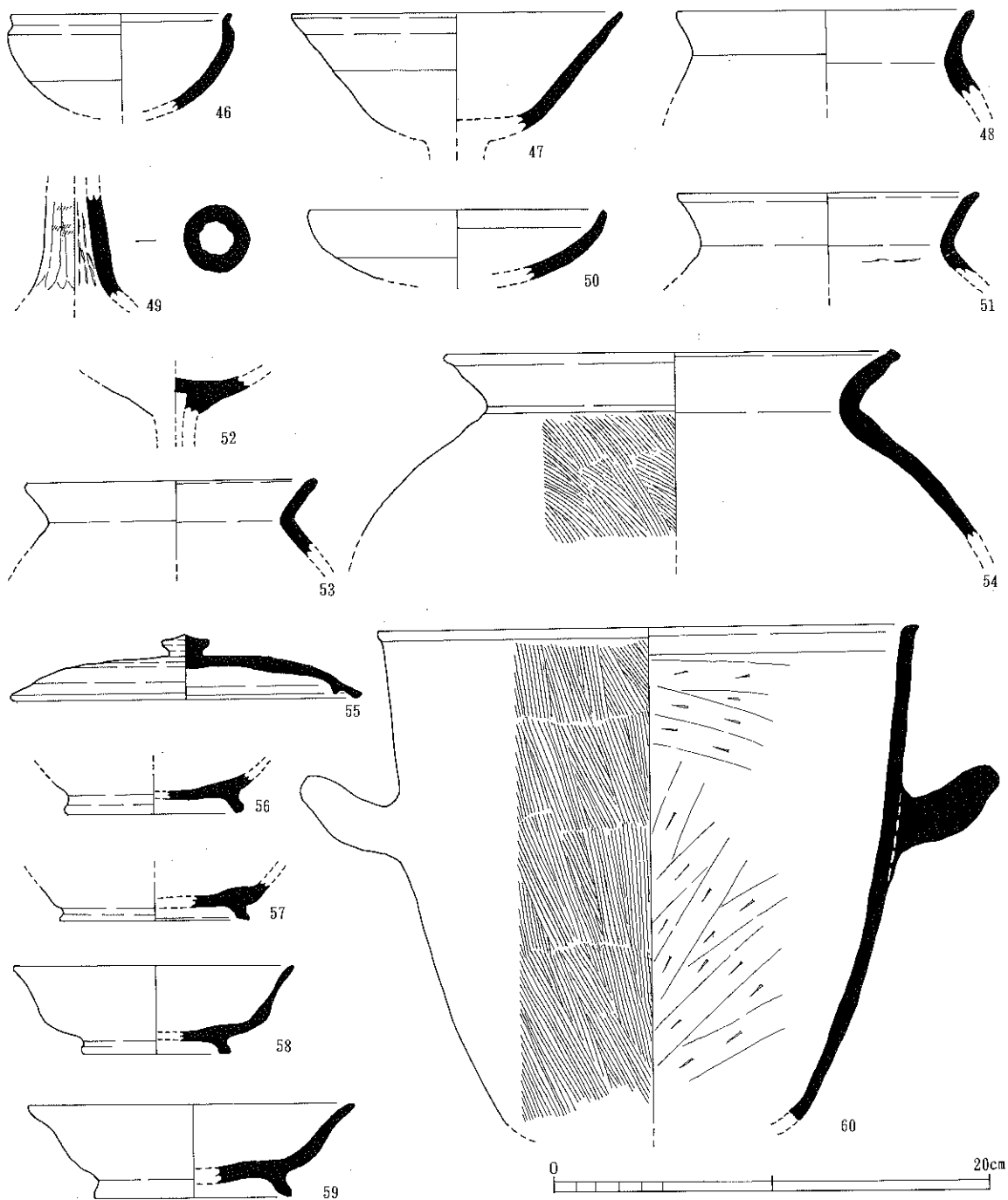
土壇S K05出土土器（第46図46～50） いずれも土師器である。46は「く」字状の口縁部に、体部は丸く椀状を呈するものである。机上復元で口径10.0cmを測る。47は高杯の杯部である。直線的に外湾ぎみに立ち上がる口縁部に端部は丸くおさめるものである。机上復元で口径15.0cmを測る。48は甕である。外反する口縁部に端部を丸くおさめるものである。机上復元で口径13.4cmを測る。49は高杯の脚部である。外面にはタテ方向のケズリ調整、内面には絞りが認められる。50は皿状の形態をした土器で、ゆるやかに内湾して立ち上がる。机上復元で口径13.4cmを測る。

土壇S K04出土土器（第46図51） 甕である。外反する口縁部に、端部は内傾する端面を有するものである。机上復元で口径13.4cmを測る。内面に粘土紐の接合痕がみられる。

竪穴住居S B03（第46図52・53・55～60） 52は高杯である。脚部と杯部の接合部には、心棒状の痕跡がみられる。53は甕である。外反する口縁部に端部を丸くおさめるものである。机上復元で口径13.4cmを測る。55は須恵器杯蓋である。口径15.6cmを測る。内面に断面三角形の低いかえりをもつ。天井部は扁平で、回転ヘラ削りによる調整を施している。宝珠形のつまみをその中央に貼り付けている。7世紀後半。56～59は輪高台を有する須恵器の杯身である。58・59は体部が外湾しながら立上がり、口縁端部は丸くおさまるものである。58は机上復元で口径12.8cm、器高4.0cmを測る。59は机上復元で口径14.8cm、器高4.2cmを測る。60は甌である。内湾ぎみに立ち上がる体部に口縁端部は面を有するものである。外面はタテ方向のハケ調整、内面は体部中程から下にかけてがナナメ方向、口縁部下はヨコ方向のケズリ調整が行われる。口径24.6cmを測る。中実の把手はやや上に向き、その断面形は楕円形状を



第45図 I区土壇S K06出土土器実測図

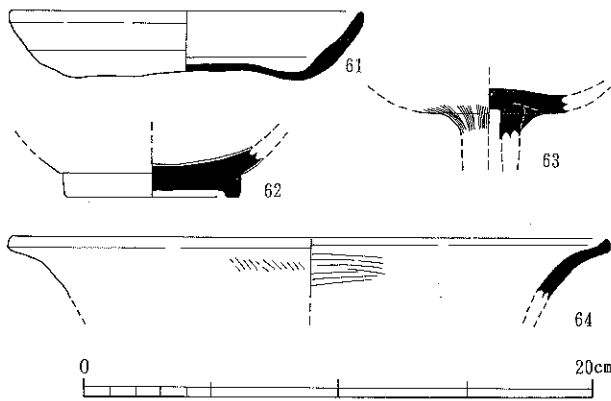


第46図 I区出土土器実測図(46~50; S K05, 51; S K04, 52・53・55~60; S B03, 54; S B07)

呈する。

竪穴住居S B07(第46図54) 甕である。外反する口縁部に端部は面を有するものである。外面はナナメ方向のハケが顕著にみられる。内面の調整は不明である。机上復元で口径20cmを測る。

遺構面精査中出土土器(第47図) 4点計測できた。61は土師器皿である。机上復元で、口径14cm、底径2.7cmを測る。体部は緩やかに外反し、口縁部を一段ナデ、端部を面取りす

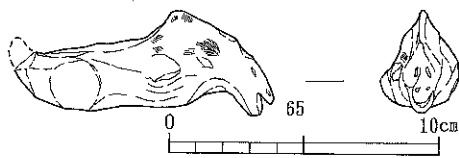


第47図 I区遺構面精査中出土土器実測図

上復元で24.4cm程となった。

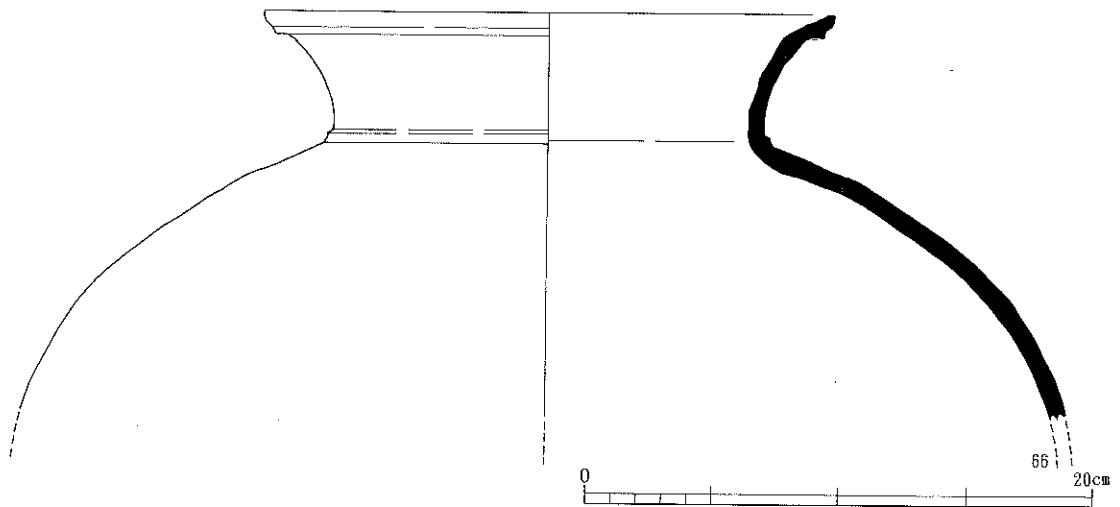
B. 2トレンチ出土遺物(第49・50図)

土壌S K12 遺物は土壌の上層から出土した。ここでは図示可能な遺物2点を提示した。この他では作業場S X09から出土した色調が赤褐色の埴輪片が十数点程出土している。65は小型の馬形土製品である。馬具を装着した痕跡が認められないため、裸馬と判断される。頭と胴体だけが残存し、足・尻尾は欠失する。足は貼り付けで、接合痕が片面にのみ明瞭にみられた。現状で、全長9.6cm、幅2.5cm程を測る。たてがみはハケで表現される。尻尾は上方



第49図 2トレンチ土壌S K12出土土器実測図

に向くものと想定される。目・鼻孔・口はヘラで表現される。耳はみられないが、取り付けた痕と思われる窪みが認められる。66は須恵器の甕である。口径22.4cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部下には凸線文を一条施す。暗青灰色。



第50図 2トレンチ土壌S K12出土土器実測図

VI ま と め

前章までに今回の発掘調査の経過、そして検出した遺構ならびに出土した遺物の内容についての報告をしてきた。ここでは、今回の発掘調査で最も大きな成果といえる埴輪窯S X08について整理し、簡単ながら本報告のまとめとしたい。

A. 埴輪窯S X08の整理

今回発見の埴輪窯S X08は、京都府下で発掘調査としては2例目の確認であり、いまだ確認例の少ない山背地域における古墳時代埴輪生産の有様を考えていく上で貴重な資料となった。唯一の調査例は、京都府南部の木津町に所在する上人ヶ平遺跡⁶⁾で、3基の窯が併置し、操業を行っていたことが判明している。前述のように、西隼上り遺跡では、窯は1基しか確認されなかった。しかしながら、窯の立地状況を考えると、未確認の窯が存在する可能性は一概には捨てきれない。見つかった埴輪窯は、戦川という川によって開析された谷地形の南側斜面上に構築されている。戦川は、調査地の南側を東から西に向かって流れ、現流路よりもさらに北側すなわち調査地に程近いところを流れていたよう⁶⁾あり、調査地内では1基しか検出されなかったものの、この谷地形を利用して構築された窯が他にも存在する可能性は十分に考えられるからである。しかしながら埴輪窯に近接して付属施設(堅穴住居S B10)が設けられ、埴輪窯S X08とセット関係でまとめられる点や上人ヶ平埴輪窯にみられるように窯それぞれが近接して形成される状況等を踏まえると、複数操業よりも、単独1基で操業していたものと現段階では想定しておきたい。

窯の操業時期については、作業場S X09内に遺棄されていた円筒埴輪と須恵器からある程度導き出すことができる。まず円筒埴輪からであるが、西隼上り埴輪窯の埴輪がもつ諸特徴は、川西宏幸氏編年のV期に位置付けられる。V期には6世紀代という実年代比定がなされている。川西氏が編年を提示された後は、発掘調査が増加するに伴って分析対象の埴輪が大幅に蓄積され、それらをもとに埴輪編年研究はより緻密な方向へと進んでいった。これら一連の研究成果に基づいてみると、今回検出の円筒埴輪は、まず大きさでは大・中・小の小、すなわち小型品の部類に該当する。この小型品については、製作技法上の変化は必要性がないためか極めて乏しく、このため編年で取り扱うにあたってはその他の遺物と含めた総合的理解を経なければ詳細な年代決定はしがたいよう⁷⁾である。今回の場合は、円筒埴輪そのものからみればV期の中でも古式の様相を示すことは明らかだがそれ以上のことは埴輪全体の残りが良くないため理解し難い。

幸いに西隼上り埴輪窯では作業場S X09から廃棄された埴輪と伴に須恵器が出土しており、

前述したように状況的に後世の混入とは考えにくいことからその須恵器をもとにして時期を絞り込むことは許されよう。出土した須恵器は杯身・蓋と甕であり、前者の遺物がもつ諸特徴から、田辺昭三氏の陶邑編年⁴⁾に当てはめると、TK208前後に相当するものと考えられ、時期的には古墳時代中期の後半頃に位置付けられる。5世紀後半頃である。この年代観は後述する考古地磁気測定による結果とも符合し、興味深い。以上のことから、西隼上り埴輪窯はV期では早い段階にあたる5世紀後半に操業を開始、埴輪を焼成していたといえる。V期埴輪の先駆けともいえるものが西隼上り埴輪窯で焼成されていたということである。この5世紀後半という時期は、従来よりいわれているようにIV期とV期とが共存する時期であり、埴輪生産の変化過程を知る重要な手掛かりを示唆してくれているものと思われる。

B. 供給先の古墳

次にこの埴輪窯で焼成された埴輪が供給された古墳について考えてみたい。前述したように西隼上り埴輪窯の円筒埴輪は、個体間の同一認定は比較的行いやすい。宇治市内における古墳が出土した円筒埴輪と比較してみると明らかに別工人の手による製品であることがわかる。現在のところ、付近に供給先として想定できる古墳は存在しないといえる。では反対に供給先は遠隔地に想定されるのかということ、埴輪の実地観察を行っていないため明らかではないが、後述するようにこの窯での操業のありかたから、付近の地下に眠っている未確認の古墳へ供給されたと解釈した方が妥当であるように思われる。また、埴輪の大きさ等を考慮すれば、供給先の古墳の形態は、小規模なおそらく円墳になるのではないかと考えられる。以上、西隼上り埴輪窯で焼成された埴輪は、近くの小規模な古墳（円墳）に供給された可能性を指摘しておきたい。

C. 埴輪窯S X08の工人達

次に埴輪窯S X08を操業していた工人達の動向についてみてみたい。前章で述べてきたように廃棄された埴輪が少量である、床面が一面しかない、灰原が極めて少ない等から、この窯で焼かれた埴輪の数は、多くを見込むことは難しく、むしろ少量の埴輪が焼成された短期間の臨時的操業であった方が理解しやすい。それほど生産量がなされていないと見込まれる窯がわざわざ遠隔地に対応するものとは思われず、古墳造営の発注があってその要請に応じて埴輪工人が臨時的に古墳の近隣に出張して埴輪を製作したという理解をここではしておきたい。ではどこからやってきたのであろうか。通常考えられるのは、大和や河内といった大規模に埴輪を生産しているところからであろう。しかしながら西隼上り埴輪窯のように小人数の工人集団が想定される場合、大和や河内といった大規模に埴輪生産を行っている地域からのダイレクトな動きだけではなく、地域に核となるような古墳群が近くに存在する際はまずはその古墳群からの流れも十分に考慮に入れる必要があるものと思われる。西隼上り埴輪

窯の場合は、宇治市に南接する城陽市の久津川古墳群の存在を抜きには考えられないであろう。久津川古墳群は、車塚古墳（180m）や芭蕉塚古墳（120m）に代表される大型前方後円墳が集中して造られた南山城屈指の大型古墳群である。久津川古墳群では、これまでの発掘調査で数多くの円筒埴輪が出土している。しかしながら、この地域は円筒埴輪の体系的な分析ができていないため、その詳細な実態は現時点では不明な点が多い。今後の資料調査で明らかにしていきたい。いずれにしろこうした一連の工人達の動きが明らかになっていくことによって古墳時代の実状がより鮮明となるものと思われる。

D. おわりに

以上、今回の発掘調査で検出された埴輪窯について簡単な整理を行った。本発掘調査では予想だにできなかった埴輪窯があらわれたために、調査は日々悪戦苦闘するものとなった。調査期間中には、様々な専門の方々に来ていただきその都度貴重なご教授をいただく中で、この埴輪窯はしだいに息を吹き替えしてきたように思う。様々な知見を数多く得ることができたが、知識は多くを学んだものの、見識についてはいまだ空をつかむような感じがあり、十分に満たされていない。今後の考究で明らかにしてゆきたい。

最後に、今回の発掘調査にあたってご協力いただいた方々にお礼を申し上げ、本報告の終わりとしたい。

（註）

- 1) 大鳳寺遺跡発掘調査会『大鳳寺跡第2次発掘調査報告書』1981
- 2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978
- 3) 形象埴輪の識別については同志社大学の辰巳和弘先生より色々とお教示をいただきました。記して感謝します。
- 4) 田辺昭三『須恵器大成』1981
- 5) 勸京都府埋蔵文化財調査研究センター「上人ヶ平遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第15冊 1991
- 6) 宇治市教育委員会「西牟上り遺跡及び菟道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報告』第12集
1988 宇治市教育委員会
- 7) 上田睦「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」『古代文化』第44巻9号 財団法人古代学協会 1992 等

付 載

西隼上り遺跡埴輪窯焼土試料の考古地磁気測定

花園大学自然科学研究室

前中 一晃

1. はじめに

西隼上り遺跡（宇治市菟道藪里28-1,27番地）は、立命館宇治高校の学生寮建設に伴う発掘調査中の遺跡で、古墳時代の埴輪窯が検出されている。窯の規模については残りがよくないため、よくわからないが、状況的には通常の埴輪窯より小規模で、窯の幅推定1.5m、現存長約3mである。出土した考古遺物より推定された年代は5世紀末～6世紀である。

今回宇治市教育委員会の依頼を受けて、西隼上り遺跡の埴輪窯跡より採取した焼土試料の残留時期測定を行ない、考古地磁気学的方法でその焼成時期の推定を行なったので、その結果について報告します。

2. 試料

1995年3月1日、宇治市教育委員会より考古地磁気測定の依頼を受けて、西隼上り遺跡の埴輪窯跡より焼土試料の採取を行なった。方位をつけて採取した試料（サンプル）は、最大で10cm立方、最小で5cm立方の大きさのもので都合10個、そのうち8個（NH01～07, 10）は壁面、2個（NH-08および09）は床面から採取したものであった。

採取されたサンプルからは、さらに複数個の小試料（スペシメン）が大学の実験室で岩石切断機を使って切り出されたが、NH-04のサンプルのみ方位が判別出来なくなっていたので、測定用のスペシメンを切り出すことはできなかった。NH-04を除く残り9個のサンプルより切り出したスペシメンの内訳は第1表に示す通りで、同一サンプルから切りだしたスペシメンは番号の後にアルファベットの符号を付して区別した。スペシメンは3.3cm立方の大きさに切り出したものと、2.5cm立方の大きさに切りだしたもの二つの種類があるが、それはアルファベットの大文字（3.3cm立方）と小文字（2.5cm立方）で区別した。結果として9個のサンプルから総計18個のスペシメンを取り出すことが出来た。

3. 残留磁気測定結果

試料の残留磁気の測定は手始めに「残留磁気測定装置」を使って各スペシメンの自然残留磁気（NRM）が測定され、次いで「交流消磁装置」を使って、窯が最後に焼成を受けて後二次的に付着した二次磁化が除去され、試料が焼成時に獲得した一次磁化を分離した。

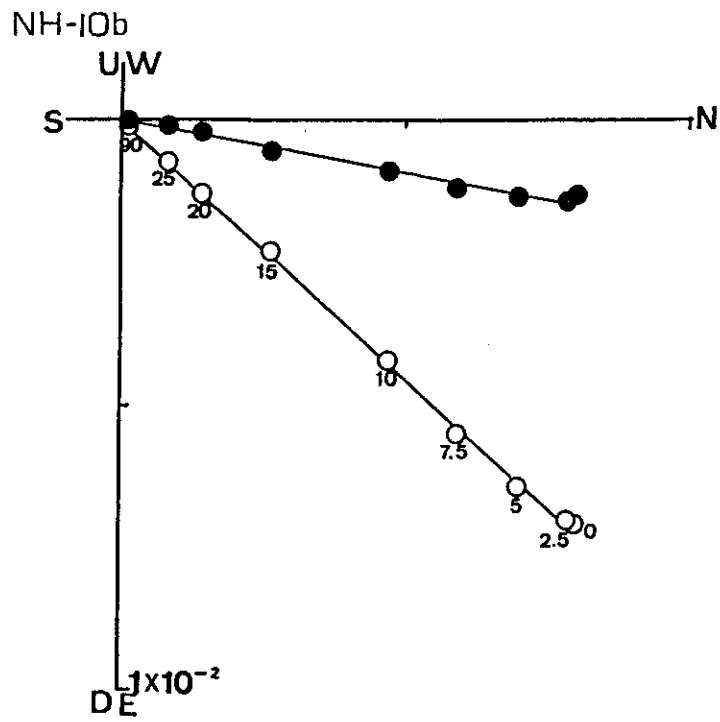
第1図に示すのは交流消磁の一例である。直交消磁図と呼ばれるこの図は、消磁の各段階で磁化ベクトルの終点をつないだものの平面図と立面図とを一つに纏めて描いたもので、黒丸が平面図（上が西、下が東、右が北、左が南）、白丸が立面図（上が上方、下が下方、右が北、左が南）を表している。白丸の下に記した数字は交流磁場の強度で、単位mT(ミリテスラ)である。(a)は壁面から採取された試料で、NH-10bと名付けられたこの試料は、2.5, 5, 7.5, 10, 15, 20, 25, 90mTの8段階で消磁された。図からわかるように、この試料は2.5mT以上の消磁で原点に向かう直線にのっている。このことは二次的に付着した磁化は2.5mTまでの交流消磁でほぼ除去されたことを示している。一方(b)は床面から採取された試料で、NH-08aと命名されたこの試料は2.5, 5, 7.5, 10, 12.5, 15, 17.5, 20mTの8段階で消磁された。図示したスケールからわかるとおり床面からの試料は、壁面からの試料に比べて一桁以上弱い。壁面からの試料同様、2.5mT以上の消磁で原点に向かう直線にのるが、大きな磁化方向の変化を伴っていることがわかる。このことから床面からの試料は磁化の強さが弱い分、相対的に大きな二次磁化が付着して見かけ上の磁化方向をおおきく変化させていたことがわかる。

残りの試料も同様に8段階の消磁を行なって直交消磁で得られた直線部分の成分分析から初成磁化の方向を決定した。第1表はこのような手続きを経て得られた結果を纏めたものである。この表で、左端の欄は前述したスペシメン番号、次の欄は試料のNRM強度で、今回採取された試料の強さは(4~150)×10emu/gの強さで、壁面から採取したもの(NH-01~07, 10)と床面から採取したもの(NH08&09)は一桁以上の強さの違いがあった。そのあとの欄で交流消磁を施した前後の磁北方向が比較して載せてある。壁面からの試料が交流消磁の前後を通じて磁北方向に大きな変化はないが、床面からの試料は大きな変化を示した。床面からの試料は消磁以前は壁面からの試料に比して大きな方向の違いを示しているが、消磁後の方向は、壁面からの試料と一致する。

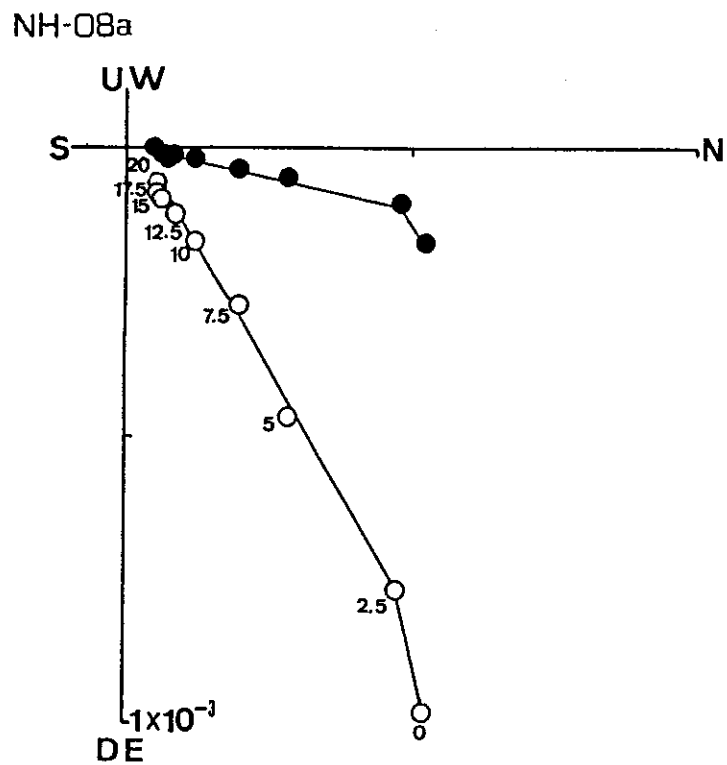
今回採取された窯跡焼土の測定によって求められた最終的な磁北方向の結果は、まず各サンプル毎の磁北方向をFisher(1959)の統計法によって求め、これらの値の平均値を再度Fisherの統計によって計算するという手続きを経て求められている。結果は第2表に示すとおりである。9個のサンプルの平均の値は偏角で3.8°、伏角47.1°、95%の誤差角が3.1°となる。

4. 考察

得られた結果は試料採取地の地磁気偏角値(-6.7°)で補正する必要がある。補正値は偏角が-2.9°±3.1°で小さな西偏を示し、伏角は47.1°±3.1°で京都における現在の値(49)に



(a)



(b)

第1図 直交交流消磁図 (a)壁面から採取した試料
(b)床面から採取した試料

第 1 表

スペンメン 番号	NRM強度 ($\times 10^{-5}$ emu/g)	交流消磁前の磁化方向		交流消磁後の磁化方向	
		偏角 ($^{\circ}$ E)	伏角 ($^{\circ}$)	偏角 ($^{\circ}$ E)	伏角 ($^{\circ}$)
NH-01A	26	6.2	49.2	7.9	50.7
02A	25	-3.8	45.7	-4.2	46.3
a	59	3.0	49.6	4.5	51.1
03a	140	6.0	48.5	6.9	49.3
b	82	6.8	44.3	7.7	44.7
c	74	3.5	47.1	6.9	50.6
05A	29	-4.0	45.2	-5.2	44.2
06a	64	-2.5	41.6	-2.8	40.3
07a	97	5.4	45.5	5.4	45.9
b	140	3.1	43.7	3.9	45.7
c	130	8.2	48.3	8.6	48.7
08A	3.8	19.9	53.2	6.0	48.6
B	3.8	19.9	53.2	6.0	48.6
a	5.4	18.4	61.0	11.0	54.7
09A	5.6	-8.5	47.7	-14.0	45.8
10a	150	5.5	52.4	5.6	52.4
b	54	8.8	41.7	9.8	41.3

近い値を示す。

第2図は、現在までに西南各地の考古地磁気測定から得られた過去二千年にわたる考古地磁気永年変化曲線で、今回の測定値は左端のスケール上で矢印で示した。誤差角も考慮して、可能性ある年代を挙げると、

伏角 (Inclination、第2図上図) で、400~550年、800~1075年の年代が、

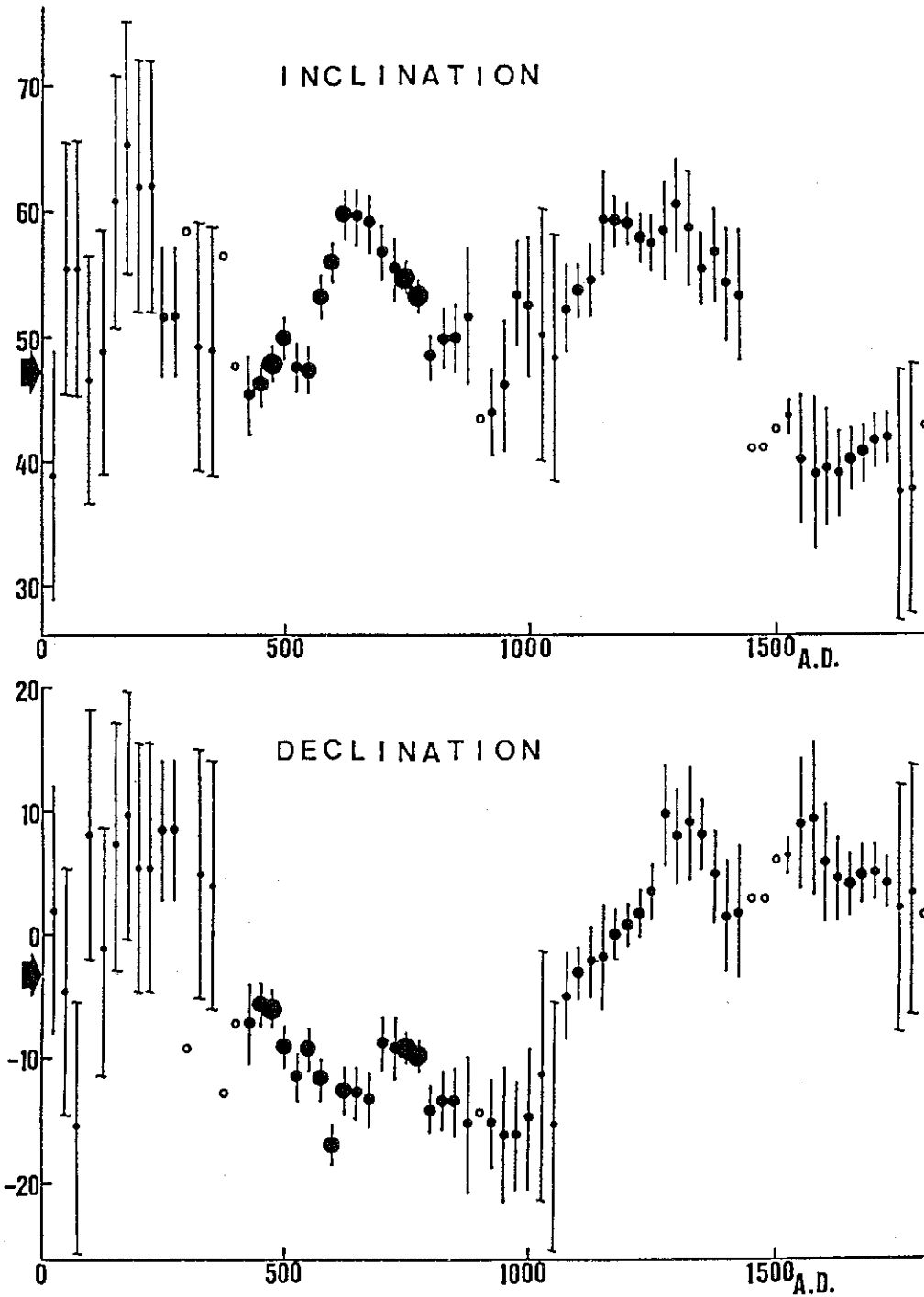
偏角 (Declination、第2図下図) で、425~475年、1050~1225の年代が与えられ、両方に共通する年代として、425~475年の年代が求められることになる。

第 2 表

試料名	試料数	交流消磁前の磁化方向				交流消磁後の磁化方向			
		偏角 (° E)	伏角 (°)	95%誤差角 (α_{95} , °)	信頼係数 (K)	偏角 (° E)	伏角 (°)	95%誤差角 (α_{95} , °)	信頼係数 (K)
NH-01	n = 1	6.2	49.2	—	—	7.9	50.7	—	—
-02	2	-0.5	47.7	13.1	363	-0.1	48.8	16.4	235
-03	4	7.0	46.9	3.4	731	8.4	48.1	3.4	728
-05	1	-4.0	45.2	—	—	-5.2	44.2	—	—
-06	1	-2.5	41.6	—	—	-2.8	40.3	—	—
-07	3	5.5	45.9	4.4	771	5.9	46.8	3.6	1199
-08	3	20.1	55.3	7.8	251	9.9	49.6	8.1	236
-09	1	-8.5	47.7	—	—	-14.0	45.8	—	—
-10	2	7.3	47.1	24.0	110	7.9	46.9	25.2	100
	N = 9	3.0	47.7	4.2	152	3.8	47.1	3.1	276



第 2 図 試料採取風景



第3図 西南日本の永年変化曲線。今回の測定値 (Inclination=47.1°; Declination=-2.9°) を矢印で示した。

抄 録

ふりがな	にしはやあがりいせきはくつちょうさがいほう							
書名	西隼上り遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第 33 集							
編著者名	浜中 邦弘							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611 京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	原因
西隼上り 遺跡	宇治市菟道 藪里28-1、 27	26204	32	34度 53分 87秒	135度 48分 58秒	941220 ~ 950302	1250㎡	学生寮 建設
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記	
窯業跡 集落跡	古墳・奈良時代	埴輪窯・堅穴住居 掘立柱建物			埴輪・土師器 須恵器			

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第33集)

西隼上り遺跡発掘調査概報

発行日 平成7年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
宇治市宇治琵琶33番地

製 作 有限会社 新進堂印刷所



宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 34 集

(白川金色院跡・平等院旧境内遺跡)

1 9 9 6

宇治市教育委員会